

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

インド教職員招へいプログラム 実施報告書

2016 年 11 月 6 日 - 11 月 13 日

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

インド教職員招へいプログラム

実施報告書

2016 年 11 月 6 日 - 11 月 13 日

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取組に、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年より主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに国際教育交流事業を開始しました。

この国際教育交流事業では、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU : Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）が、国際連合大学の委託のもと、これまでに韓国、中国およびタイとの交流を行い、2016 年 10 月までに韓国からは延べ 1,877 名、中国からは 1,588 名、タイからは 30 名にのぼる教職員を招へいしてきました。また、日本から訪韓した 567 名、訪中した 324 名の教職員と合わせ、日韓、日中、日タイ間の相互理解促進、学校間交流に大きく貢献しております。2016 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省（MHRD: Ministry of Human Resource Development）、インド環境教育センター（CEE: Centre for Environment Education）の協力のもと、「インド教職員招へいプログラム」を実施することとなりました。

今回のプログラムでは、2016 年 11 月 6 日から 13 日まで、インドの小・中・高等学校の現職教職員等 14 名を日本に招へいしました。参加者は、教育についての講義、学校や文化施設の訪問、日本教職員との教育交流会議等を通して、日本の教育制度や持続可能な開発のための教育（ESD）の実践および日本の文化・伝統についての理解を深めるとともに、両国間の相互理解と友好促進に貢献しました。

実施にあたりましては、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省、インド環境教育センター、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多くの方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて、関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2017 年 2 月

国際連合大学

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目次

第Ⅰ章	実施内容	5
-----	------	---

第Ⅱ章 コメントと提案

1.	インド教職員	17
2.	訪問受入れ機関	25
3.	事業主催者・担当者	28

付録

1.	実施要項	31
2.	プログラム日程	33
3.	参加者リスト	36
4.	関係機関リスト	40
5.	文部科学省講義資料	43
6.	インドの教育に関する講義資料	46

第Ⅰ章 实施内容

1. 来日、オリエンテーション (第 1・2 日)

「インド教職員招へいプログラム」の参加者 14 名は、2016 年 11 月 6 日（日）にインドを出発、翌 7 日（月）の朝に日本に到着した。同日、宿泊先である新橋愛宕山東急 REI ホテルにほど近い、TKP スター会議室虎ノ門にて、オリエンテーションが行われた。

はじめに、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）人物交流部の進藤由美部長が、「日本の学校や先生方との交流を深めていただき、それぞれの目的が達成されますことを心から祈念しております」と参加者に歓迎の挨拶を述べた。続いて随行する ACCU 職員が紹介され、最後に、担当職員よりプログラム日程の説明や滞在ガイダンス等が行われた。



オリエンテーションの様子

2. 千葉県立船橋北高等学校（第 3 日）

プログラム 3 日目の 11 月 8 日（火）午後には、千葉県立船橋北高等学校を訪問した。今回のプログラムで訪問した学校の中で、唯一郊外に位置する学校であり、訪問団は

都心とは異なる車窓からの風景を楽しみつつ、学校へと向かった。

訪問団が学校に到着すると、まずは教頭の出野晃平氏から歓迎の挨拶があった。インド教職員を代表してサビハ・シェイク氏が受入れに対する感謝の意を述べた。その後、訪問団から記念品が船橋北高等学校に贈呈された。

続いて、訪問団は 2 つのグループに分かれて授業を見学した。どちらのグループも英語科の先生が先導してくださり、直接英語で説明をしていただきながら数学、国語、家庭科、コンピューター等さまざまな授業を見学した。体育の授業では、体育館でバドミントンをしていた生徒にインド教職員が混ざってラリーを行うなど、生徒とふれあう場面も見られた。

その後会議室に戻った訪問団は、お茶をいただきながら日本人教職員との質疑応答の時間をもった。訪問団からは、「学校の特色」や「学生の進路」「教員の待遇について」などの質問があがった。

部活動の見学では、グラウンドやテニスコート、弓道の練習場などを周り、活発に活動する運動部を見学した。一生懸命に練習する生徒たちの生き生きとした姿に目を細める訪問団たちであった。その後、茶室に向かい、茶道部の生徒たちに直接お点前の披露をしていただいた。茶室で直接体験をできるスペースは限られていたが、14 名全員分の抹茶とお茶菓子を準備していただき、訪問団は非常に感激したようすであった。

部活動の見学から戻ると、インド教職員のためにチャイが準備されており、温かなおもてなしに感謝しつつ訪問を終えた。



茶室にて茶道の体験をするインド教職員



体育の授業で生徒とバドミントンのラリーをする様子

3. 文部科学省表敬訪問（第4日）

プログラム4日目の11月9日（水）午前中は、文部科学省への表敬訪問を行った。はじめにインド教職員訪問団を歓迎して、文部科学省国際統括官の森本浩一氏より「ナマステ」で始まる和やかな挨拶があり、「日本とインドの間では、1952年に国交を樹立して以来友好関係を構築してきました。特に、近年、日印間の両首脳は毎年両国を往復する友好な関係を築いており、この週末にも、モディ首相が再び来日されます。日印間では、政治・経済・外交の分野にとどまらず、教育分野でも若者の交流が推進され、徐々に交流が拡大しています。その

ような中で、今年からインドの教職員を招へいするプログラムを始めることといたしました」とインドとの交流の重要性を強調し、「皆様の滞在中、日本の教育制度、学校での道徳や理数科などの教育実践について見ていただくとともに、日本の教員や生徒達との交流、文化体験などを通じて、日本の生活や文化にも知見を深めていただきたいと思います」と述べ、訪問団を歓迎した。挨拶に続いて、森本氏と訪問団を代表してインド環境教育センターのプラモード・クマール・シャルマー氏、インド連邦政府人的資源開発省のサントーシュ・クマール・ヴェルマー両氏の間で記念品交換が行われた。前日に訪問した千葉県立船橋北高等学校を含め、今回訪問したすべての学校・機関に対してインド側が贈呈したのは、インドの自由を象徴する木彫りの糸車とインドの教科書であった。プログラムの趣旨に合った、インドらしい贈り物に、各学校・機関ではよろこびの声が上がった。

次に訪問団代表として、メーガー・サクラニ氏による挨拶があった。本事業の開催に対して感謝の言葉を述べたあと、前日に訪問した船橋北高校での体験を交えながら、このプログラムをきっかけに相互の交流を進めていきたいと話した。

最後に全員で集合写真を撮影し、表敬訪問を締めくくった。この日は表敬訪問に合わせて訪問団の女性の多くが伝統衣装を身に着けており、華やかに場を彩った。



記念品の贈呈（左：サントーシュ・クマール・ヴェルマー氏、右：森本浩一氏）

4. 講義（第4日）

「日本における初等中等教育について」
文部科学省 初等中等教育局
初等中等教育企画課専門職
市川 清治 氏

表敬訪問に続いて、同会場にて日本における初等中等教育について、文部科学省の講義が行われた。講師は初等中等教育局初等中等教育企画課専門職の市川清治氏であった。講義内容は以下の通り。

日本の基本的な初等中等教育制度

- ① 学校体系、学校数について
- ② 在籍者数・就学率の経年変化
- ③ 義務教育制度の概要
- ④ 義務教育費国家負担制度の概要
- ⑤ 教科書無償給与制度
- ⑥ 教員養成・免許制度の概要
- ⑦ 教育行政制度の概要
- ⑧ 学習指導要領とは、改訂の視点
- ⑨ 小中学校の標準授業時間数
- ⑩ 道徳の授業事例

日本の教育政策の一部の紹介「高大接続」

- ① 高大接続改革とは
- ② 高大接続改革の必要性
- ③ 高大接続改革の全体像

訪問団は熱心に講義を聞き、講義の後には、「国立と公立の違いは何か」「新卒教員の採用はどのように行っているのか」「英語教育について」など活発に質問をする姿が見られた。前日に学校訪問を経験していることから、実際の学校の姿をイメージしながら講義を聴くことができたようであった。



市川氏の講義を受ける訪問団



質疑応答の様子

5. 広尾学園中学校・高等学校（第4日）

同日午後、一行は広尾学園中学校・高等学校を訪問した。同校は「本科コース」「インターナショナルコース」「医進・サイエンスコース」の3コースで編成される私立の中高一貫校である。今回の訪問団の多くが理数系の科目を専門としていることから、

専門的な理数科目の授業や設備に注目が集まった。

訪問団は学校に到着後、副校長の角田陸男氏より「日本の先端をいく中学・高等学校の教育の現状を見て頂くとともに、皆様からは、私たちのこれからの教育活動に役立つご意見を頂ければ幸いです」と歓迎の挨拶をうけた。続いて、インターナショナルコース教諭の **Plunkett** 氏から英語で学校説明を受けたあと、訪問団を代表してヴェーヌ・アガルワール氏がロバート・ケネディ氏の名言 “**The future is not a gift. It is an achievement.**”（未来は与えられるものではない。それは、達成するものだ）に始まる感謝のスピーチを行った。その後、訪問団から記念品の贈呈を行った。

続いて、一行は休憩を挟みながら、2 コマの授業および校内の施設を見学した。英語で学ぶインターナショナルコースの授業や、充実した設備を使った実験の授業が参加者の目を引いたようであった。また、医進・サイエンスコースの生徒たちが取り組む研究をまとめた発表資料が壁に貼り出されており、専門性の高さに訪問団は驚いていた。

授業の見学を終えると、理数科の教職員およびインドにルーツを持つ 3 名の生徒との交流の時間となった。異国での思いがけない出会いに、訪問団は大変喜び、彼らの日本での生活や学校生活について、インドの情勢についてなど話が弾んだ。最後に交流に参加した生徒とともに記念写真を撮影し、訪問のしめくくりとなった。



研究のための設備を見学する一行



生徒・教職員との懇談

6. 荒川区立尾久宮前小学校（第 5 日）

プログラム 5 日目となる 11 月 10 日(木)午前中、一行は荒川区立尾久宮前小学校を訪問した。同校は、1934 年に設立され、児童数は 290 名である。2012 年にユネスコスクールに登録されており、「人と人・人と自然・人と社会がつながる教育を通して、持続発展する社会を築く人・世界の平和に貢献できる人を育てること」を目標に教育活動を推進している。

学校に到着した訪問団の目に飛び込んできたのは、訪問団 14 名それぞれの地域で使われている言語による「こんにちは」が壁

一面に貼られている様子であった。廊下で出会った児童たちからの「ナマスカール」「カンマ・ガーニー」と、多様な言葉での挨拶に感激しながら、一行は、まずランチルームへと案内された。

校長の伊藤英夫氏が訪問団 14 名それぞれの母語で「こんにちは」とあいさつをしたのち、歓迎の挨拶を述べると、インド教職員のジェヌス・ジャイコブ氏は「訪問団を代表し、今回の学校訪問という貴重な機会を得られたことに感謝したい」とお礼を述べた。挨拶に続き、訪問団から学校への記念品贈呈が行われた。

続いて、伊藤氏が学校の紹介を行った。スライドに映される多種多様な活動の様子に訪問団は見入っている様子であった。

その後、一行は 2 つのグループに分かれて各学年の授業を見学した。全クラスに導入されている電子画面、習熟度別で教えている算数、小学 1 年生から導入されている英語の授業などが紹介された。

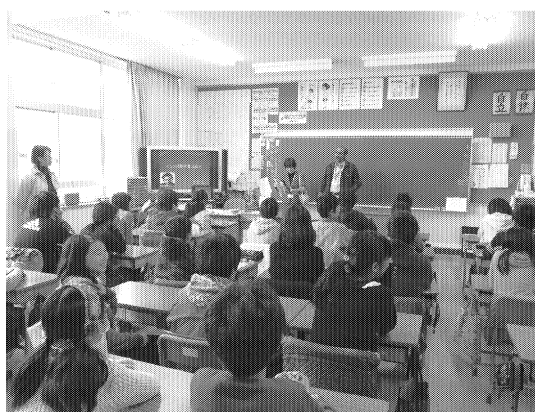
ランチルームに戻り、用意されていた都電モナカや金平糖、紅茶を堪能した後、体育館にて全校児童が演奏する「八木節」を見学した。演奏はもちろんのこと、訪問団は児童代表が日本語、英語で堂々と挨拶をする姿にも感銘を受けていた。

その後、訪問団は 5 年生、6 年生のクラスで「インド式掛け算」と「インドの学校生活」をそれぞれ紹介する時間をもった。時間は限られていたものの、インドについて直接紹介することができた貴重な時間であった。

盛り沢山の日程を終え、訪問団は別れを惜しみつつ学校を後にした。



伊藤英夫校長（右）と、訪問団それぞれの母語で書かれた歓迎の看板の前で



インド式掛け算を児童に紹介する教職員

7. お茶の水女子大学附属中学校 (第 5 日)

同日午後、一行はお茶の水女子大学附属中学校を訪問した。今回訪問する学校の中で唯一の国立学校であり、「自主研究」の授業や長い歴史を持つ帰国子女教育といった特色がある。

到着後、会議室に案内された一行は、まず副校長の小泉薫氏より歓迎の挨拶を受け、続いて訪問団を代表して A.カーシヴィスワナタン氏がお礼の言葉を述べた。その後、訪問団から記念品の贈呈を行った。

続いて、研究・帰国部部長の西平美保氏

より、同校の研究活動および生徒による自主研究の成果の紹介があった。研究の期間の進み具合を示すグラフや、それぞれの個性が活かされたテーマに訪問団は興味津々といったようすであった。

その後訪問団は 2 班に分かれ、それぞれに授業や校内の設備を見学した。図書館では、「ようこそインドの先生方」と題してインドを紹介する本を特集するコーナーが設置されており、参加者は大いに喜んでた。

授業終了後は各クラスで終礼・清掃の時間となり、訪問団は 1 学年の様子を自由に見学した。インドの学校では、児童・生徒自身が清掃活動を行うことはほとんどなく、とりわけトイレ掃除を生徒自ら行う様子は訪問団に衝撃を与えていた。

清掃時間の見学を終えると、事前に参加の意思表明をした 25 名の生徒と交流会の時間となった。英語が堪能な生徒は直接英語で、英語に自信がない生徒も通訳を介して活発に質問をした。特に「インドは IT 大国であり、パソコンに向かう時間が長い人も多いと思うのだが、目がいい人が多いという印象がある。何か秘訣があれば、知りたい」という質問に対しては、訪問団を代表してヴェーヌ・アガルワール氏が「目にいいヨガ」を実際にやって見せ、その場に参加した皆でヨガを実践した。ヨガといっても、動かすのは目と指だけで、座ったままでも簡単に行えるとあって、場は大いに盛り上がった。



図書館の特設コーナー



目にいいヨガを実践する様子

8. 日本文化体験（第 6 日）

訪問 6 日目となる 11 月 11 日（金）は日本文化の体験として午前中は浅草を観光、午後からは江戸東京博物館を見学した。訪問団は宿泊先の新橋愛宕山東急 REI ホテルからバスで日の出桟橋へと向かい、フェリーで浅草を目指した。所要時間は 40 分ほど、風景を楽しみながら短い船旅となった。浅草に到着すると、あいにくの曇り空でスカイツリーの全体像を見ることは叶わなかったものの、仲見世通りや浅草寺の見学を中心に、それぞれが浅草を楽しんだ。

浅草で自由時間を過ごした後で昼食をとり、一行はバスで両国の江戸東京博物館へと向かった。精巧なミニチュアや昔使われていた乗り物の体験など、博物館の見学を満喫した。



雷門の前での記念撮影



博物館内の橋の上で

9. 日印教育交流会議（第7日）

プログラム7日目となる11月12日(土)には、日本出版会館の会議室にて日印教育交流会議が開催された。参加者は、訪問団14名と公募によって集まった日本の教職員14名の計28名であった。

当日は、下記のような日程でプログラムを実施した。

＜午前の部 10:00～12:30＞

講義：インドの教育について

ブラモード・クマール・シャルマー氏

テーマ別ディスカッション

ファシリテーター：福田訓久氏（株式会社メディア総合研究所）、ブラモード・クマール・シャルマー氏（インド環境教育センター）

昼食 12:30～13:30

＜午後の部 13:30～16:00＞

プログラム報告

サントーシュ・クマール・ヴェルマー氏

（インド連邦政府人的資源開発省）

訪問団へのプログラム参加証明授与
日印の教職員で神楽坂散策

この会議は、日本の教職員にインドの教育について概要を知ってもらい、その講義を踏まえてテーマ別の意見交換をするという午前の部と、この1週間のプログラムについてインド教職員が発表し、日本教職員の前でプログラムを締めくくるという午後の部で構成された。また、会場が神楽坂に位置することから、終了後は日印の教職員が一緒に街歩きを楽しむという時間をもった。

まずは午前の部として、訪問団を代表してブラモード・クマール・シャルマー氏がインドの教育について講義を行った。（詳細は巻末の付録を参照）インドの教育の特色、また抱えている問題点などについて、日本ではなかなか知ることのできない内容の含まれた貴重な講義であった。

続いて福田氏の進行、ブラモード氏のサポートによるディスカッションが始まった。あらかじめ決められたグループごとにテーブルに着席している参加者は、「日本の地図」「インドの地図」を何も見ずに描いてお互いに見せ合う、といったところから打ち解けていき、自己紹介を経てディスカッションへと移った。

ディスカッションは4つのグループ（ス

プリング・サマー・オータム・ウィンター)に分かれて、日印双方の参加者が事前に提出した申込書から、関心のあるテーマを書き出した紙がテーブルにセットされている状態で始まった。各グループのテーマ、および意見交換がなされた内容は下記のとおりである。

1. スプリング（主に理数科の教職員）

- ・実験・アクティビティを中心とした理数科目の学習
- ・生徒が興味を持つような、身の回りの出来事と数学とを絡めたプロジェクト
- ・学校内でお米や野菜を育てて食べる取り組みについて
- ・中等教育における理数科教育の実態
- ・ICT 教育

2. サマー（主に授業外の特別活動や道德教育に関心のある教職員）

- ・ヨガの授業
- ・学びを家やコミュニティにどのように広げているか、それに対する反応は？
- ・ESD の実践事例
- ・平和、価値観の教育
- ・地方・公立の学校ならではの教育

3. オータム（主に国際交流や帰国子女教育などのテーマに関心のある教職員）

- ・地理教育
- ・母国語以外の教育
- ・帰国子女への教育
- ・異文化理解教育と国際理解教育
- ・他国との交流状況

4. ウィンター（主に理数科の教職員）

- ・教科書の比較
- ・理数科目を通じた文化交流

- ・理数科教育の質の向上
- ・環境教育と防災教育
- ・「コンセプト・マッピング」を用いた国際協働学習

いずれのグループも、日印双方の教職員が積極的に意見を出し合い、時間が足りないほどであった。意見交換の後、自分自身で振り返りの時間を持ち、お互いに共有しあったところでディスカッションが終了となった。



描いた地図を見せ合う教職員

昼食時は、教職員全員でインドカレーをいただいた。その間には、英語が苦手な日本の教員も熱心にインドの教育などについて話をインド教職員に聞く様子が伺えた。また、日本の高校地理の授業で使用している資料集にあるインドの部分印刷したものを、一人ひとりに配る参加者もいた。

午後の部は訪問団の代表によるプログラム報告から始まった。このプログラムの目的、インドから何を期待して日本に来たかというところから始まり、期間中に訪問した4つの学校の紹介と「訪問した各学校では、生徒が感じるストレスを軽減しようという姿勢を感じられた」「ほとんどすべての授業が日本語で行われるということに驚い

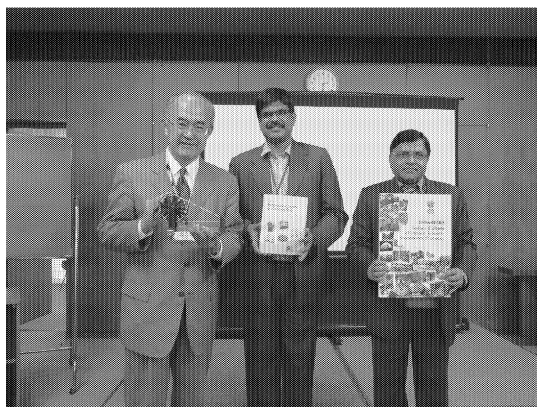
た。母語を大切にしている点は参考にした
いが、英語をはじめとした外国語教育も重
視すべきではないか」などといった感想、
提言が述べられた。

その後、本プログラムの主催団体である
国際連合大学サステナビリティ高等研究
所 事務局長の古田知美氏から、一週間のプ
ログラムを終えた訪問団への挨拶があった。
1 週間熱心にプログラムに参加されたこと
をねぎらいながら、「今回のプログラムで得
られた日本とインドの教職員のネットワー
ク、交流の輪を今後も広げていただき、両
国間の教育交流の一層の推進、ひいては、
両国間の友好と相互理解の促進にご尽力い
ただくことを祈念しております」とプログ
ラム後の活動に期待を寄せた。

続いて、公益財団法人ユネスコ・アジア
文化センター（ACCU）事務局長の堀江振
一郎より訪問団ひとりひとりに、プログラ
ムの参加証明書が手渡された。日本人教職
員に見守られ、参加証明書を受け取る訪問
団の表情は安心したようにも、誇らしげに
も見えた。

参加証明書の授与の後には、訪問団と
ACCU との間で記念品の交換が行われ、1
週間のプログラムの締めくくりとなった。

その後、15 時から 16 時の間は、日印の
教職員で神楽坂を散策した。会議当日には、
「神楽坂まち舞台 大江戸めぐり 2016」と
いうイベントが神楽坂で開催されており、
伝統音楽が街中で演奏されるなどの催しが
あったため、イベントを見学しつつの散策
となった。



記念品交換。左から堀江振一郎（ACCU 事務局長）、訪問
団団長のプラモード・クマール・シャルマー氏（インド
環境教育センター）、サントーシュ・クマール・ヴェルマ
ー氏（インド連邦政府人的資源開発省）



参加者全員での記念撮影



伝統音楽の演奏を楽しみながら歩く訪問団

第II章

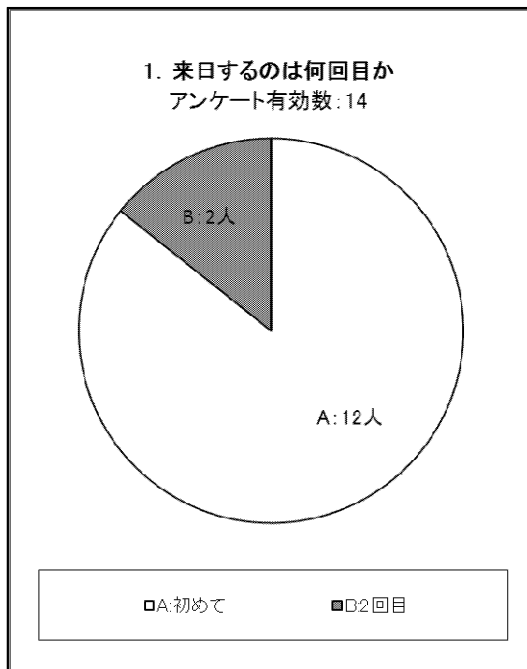
コメントと提案

1. インド教職員
2. 訪問受入れ機関
3. 事業主催者・担当者

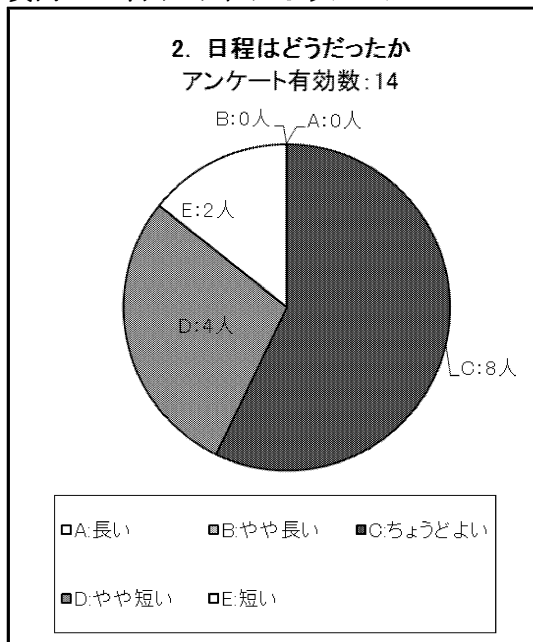
1. インド教職員

*原文は英語。ACCUにて翻訳。

質問 1. 来日するのは何回目か



質問 2. 今回の日程はどうだったか



【ちょうどよい】

- 配慮された時間構成であり、その中で様々なタイプの学校訪問ができ、時間配分は適切だった。(A-2 ケトキー・スチ

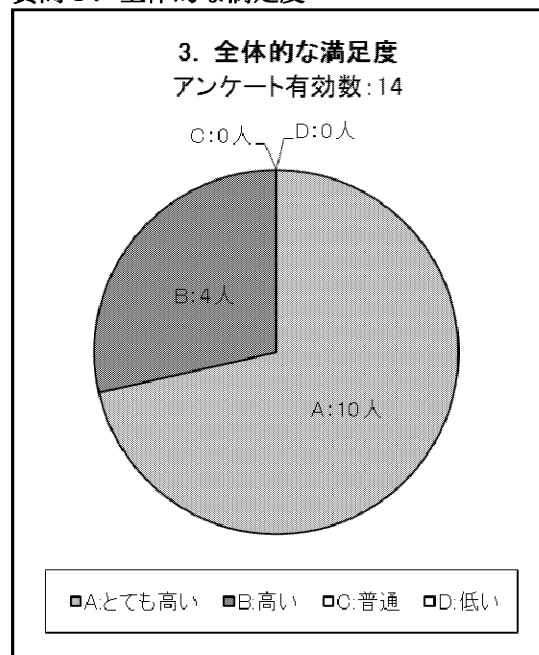
ト・ガドレ)

- 与えられた時間の中で日本の文化や社会を得られるように構成されていた。(A-7 ヴェーヌ・アガルワール)
- ほとんどすべての分野について話し合うことができ、それに関係した活動を含んでいた。(A-15 サントーシュ・クマール・ヴェルマー)

【やや短い・短い】

- 1日1つの学校見学が望ましい。そうであつたら、もっと児童生徒との交流に時間がさけたと思う。(A-3 メーガー・サクラニ)
- 日本の教育と文化を理解するにはもう少し、時間が必要であつた。(A-6 サリター・マハラ)
- 少なくとも 15 日間ぐらいは先生との交流や学校見学の時間があつたらよかった。(A-13 ソーハン・ラル)

質問 3. 全体的な満足度



【とても高い】

- 計画がよく練られていた。時間を有効に使い、日本について知ることができるようになっていた。(A-1 プラモード・クマール・シャルマー)
- 学ぶべきこと、インドで今回のプロジェクトを反映できることが多くあった。(A-2 ケトキー・スチト・ガドレ)

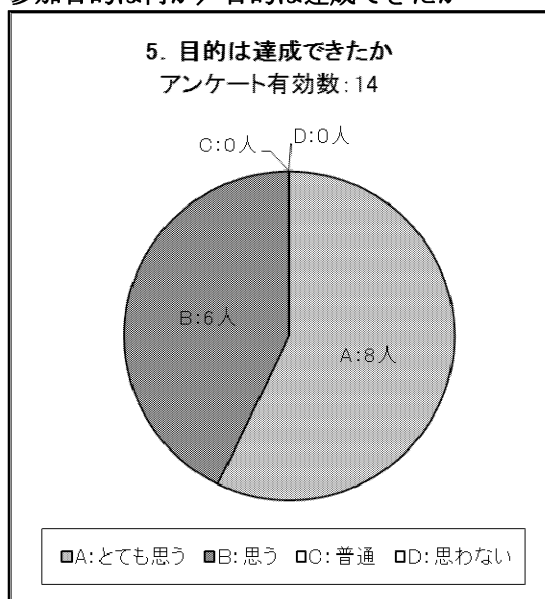
- このプログラムは互いに日本とインドについて学ぶこと、共有することができる素晴らしいプログラムだった。(A-3 メーガー・サクラニ)
- 日本の文化、教育制度について学ぶことのできる実り多きプログラムとなっていた。日本の教育制度は本当に素晴らしく、インドの制度にも反映できればと思う。(A-5 ミタリ)
- 日本の文化や文化遺産について学ぶことができた。日本とインドの繋がりが築かれたのではないかなと思う。(A-7 ヴェーヌ・アガルワール)
- 計画や準備が全てにおいてよくされていた。(A-13 ソーハン・ラル)
- 日印両国で現実の教育改善のために、今後もこのプログラムが続くことを願う。(A-15 サントーシュ・クマール・ヴェルマー)

【高い】

- 日本の教員と生徒の交流がより必要であると感じた。(A-4 R.P. ティワーリ)
- 全ての学校関係者と交流する時間を持つことができた。また、日本の教授法を学ぶことができた。(A-6 サリター・マハラ)

質問 4 および 5.

参加目的は何か／目的は達成できたか



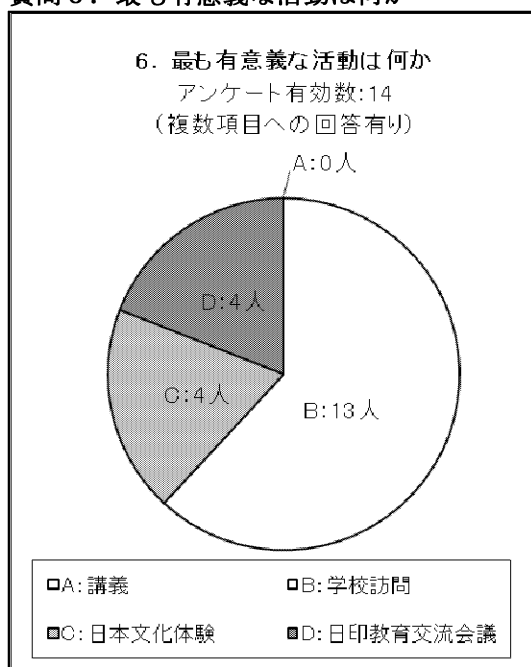
【とてもそう思う】

- 参加目的：教育制度に対する理解を深化し、訪問校との協働を育むこと。(A-1 プラモード・クマール・シャルマー)
- 参加目的：学課、課外活動へのすべての生徒の包摂および学校活動の管理について学ぶこと。個人的な主な目的は学校におけるゴミ処理を見学することだった。(A-2 ケトキー・スチト・ガドレ)
- 参加目的：日本で感じ、学んだすべてのことを、インドの農村部に属する私の生徒たちに伝えること。(A-5 ミタリ)
- 参加目的：日本の教育システムを理解することと、最高の指導法と価値をインドに持って帰ること。(A-11 サビハ・シェイク)
- 参加目的：教育学習の革新的な方法を知ることと、教育についての考えを共有すること。(A-13 ソーハン・ラル)

【そう思う】

- 参加目的：科学技術が非常に発展している日本において、理数科教育がどのように行われているのかということ。(A-3 メーガー・サクラニ)
- 参加目的：日本の教育システム、その教授法、その他の共通の関心分野—特に数学教育の分野—について知ること。(A-4 R.P. ティワーリ)
- 参加目的：日本がいかに最新の科学技術を学課に取り入れたのか学ぶことが目的だった。(A-8 A. カーシヴィスワナータン)

質問6. 最も有意義な活動は何か



【学校訪問】

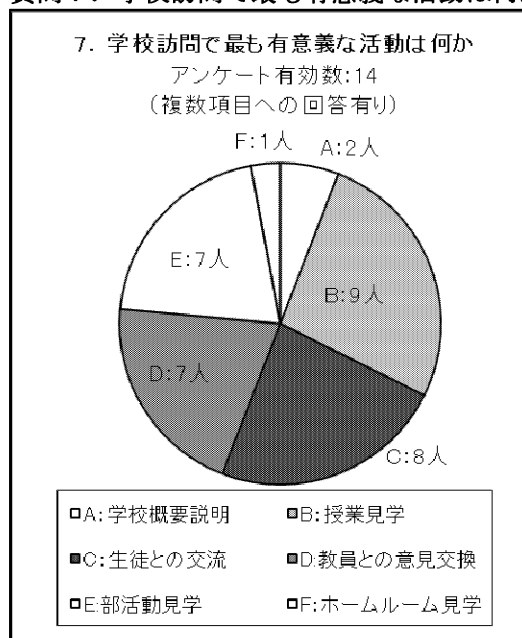
- 学校訪問により生きた教育の感覚と体験を得ることができた。(A-1 プラモード・クマール・シャルマー)
- 日本の教育システムの実態を見聞できた。(A-4 R.P. ティワーリ)
- 教員と生徒間の関係性についてよく理解することができ、生徒が自分の感情や意見を自由に表現できるということは評価できる点であった。(A-5 ミタリ)
- 教室、理科実験室、体育館の訪問、音楽・美術の授業、日本の伝統音楽、伝統衣装について知ることができた。生徒の自立心、教室におけるフレンドリーな雰囲気を伺えた。(A-6 サリター・マハラ)
- 学校訪問は学習指導要領をよりよく理解させてくれ、生徒と先生と有益な交流を結ばせてくれた。(A-11 サビハ・シェイク)

【日印教育交流会議】

- 学校生活の実態に触れた後に、交流会を通して、意見交換を行うことで、より明確な見解を得ることができた。そのことは、私たち教員が生徒と社会のために最大の努力を行うべきという信条をより強くすることにつながった。(A-7 ヴェーヌ・アガルワール)

- 日印教育交流会は日本の教育システムについて理解する手助けになった。(A-13 ソーハン・ラル)

質問7. 学校訪問で最も有意義な活動は何か



【授業見学】

- クラス訪問、生徒・教員との交流から得た学びが多かった。(A-3 メーガー・サクラニ)
- 授業見学により、生徒が利用する教室の環境や備品 (LCD プロジェクターなど) を把握できた。(A-4 R.P. ティワーリ)
- 日本の生徒は教室で教員やカリキュラムの圧力を受けることなく、自由な精神で学んでいる。それによって、多くを吸収できるのだと思う。(A-5 ミタリ)
- 日本の教育システム、教授法、教室の環境に関する理解が促進された。日本の学校の各施設は整備され、本当に素晴らしい。(A-6 サリター・マハラ)

【生徒との交流】

- 生徒との交流で全ての教育制度を印象づける考えを得た。(A-1 プラモード・クマール・シャルマー)
- 生徒の学習能力を把握するのに役立った。(A-4 R.P. ティワーリ)

【教員との意見交換】

- 適用されている教授法を理解するのに役立った。(A-4 R.P. ティワーリ)

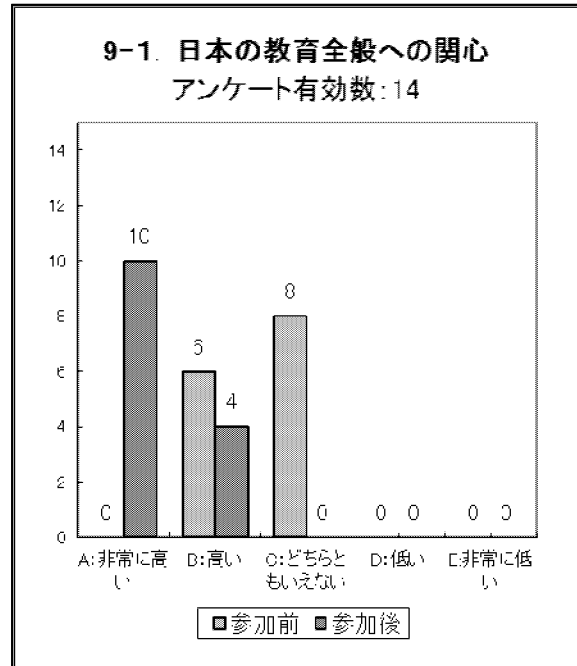
【部活動見学】

- 生徒たちは自由にスポーツ、音楽、美術などの部活動ができる環境があることがわかった。(A-13 ソーハン・ラル)
- 部活動で生活技能を導入していることに、感銘を受けた。(A-14 M.S. クマールサーミ)

質問8. 他にどのようなプログラムがあったらよいか

- カリキュラムの応用と教科書の内容についての交流 (A-1 プラモード・クマール・シャルマー)
- ノンフォーマル/インフォーマル教育に関するプログラム (A-1 プラモード・クマール・シャルマー)
- 生徒と教員と共に直接活動に混ざる時間 (A-3 メーガー・サクラニ)
- インド人側の教員の生徒たちも交流できるプログラム (A-5 ミタリ)
- インドの教員が日本の生徒に、インドのヴェーダ式数学、インドの文化や社会を教える時間があればよかった (A-6 サリター・マハラ)
- 生徒と先生との交流の時間を教育システムの詳細や教授技術をよく理解するためにプログラム自体をもっと長くすべき。(A-13 ソーハン・ラル)

質問9-1. 日本の教育全般への関心の変化



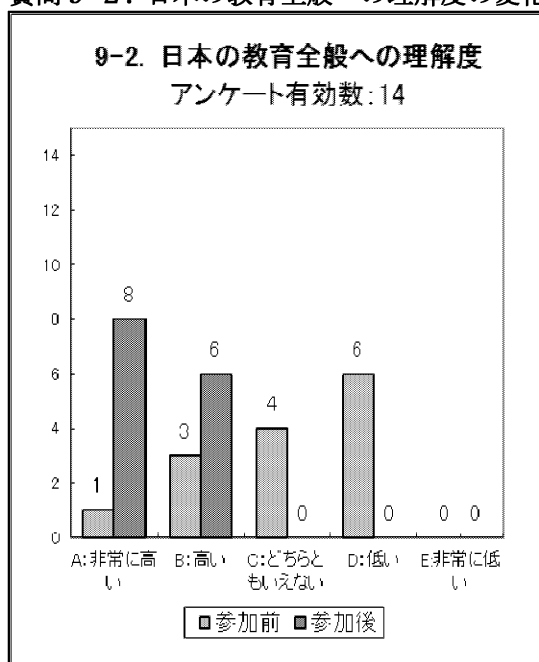
【高い→非常に高い】

- 私が日本の教育システムに高い関心を抱いていたのは、よい評判を聞いていたから。実際に訪問し、体験して、さらに深く知りたいと思うようになった。(A-3 メーガー・サクラニ)
- 学校訪問と生徒・教員間の交流を見て、日本の教育システムへの関心が高まった。(A-6 サリター・マハラ)

【どちらともいえない→非常に高い/高い】

- 日本の教育について事前にあまり知らなかったが、本プログラムに参加して、生徒に負担をかけることなく、かつ、自由なスタイルで教える方法について学んだ。自分のインドのクラスでもこれらの教授法を実践したい。(A-5 ミタリ)
- 直接教育現場に入ること、自分の見解がより明瞭かつ鮮明なものとなった。(A-7 ヴェーヌ・アガルワール)
- どうやって援助が必要な障害をもつ子どもに教えるのかを知りたい。子どもたちは特別に訓練を受けた先生に教えられるのかそれともそうでないのか。(A-10 ジェヌス・ジャイコブ)
- 日本の教育制度、生活技能を導入する学校活動に感銘を受けた。(A-14 M.S. クマールサーミ)

質問 9-2. 日本の教育全般への理解度の変化



【非常に高い／高い→非常に高い】

- いくつかの学校を見学し、実態について観察したことで、自身の理解が深まった。(A-8 A. カーシヴィスワナータン)

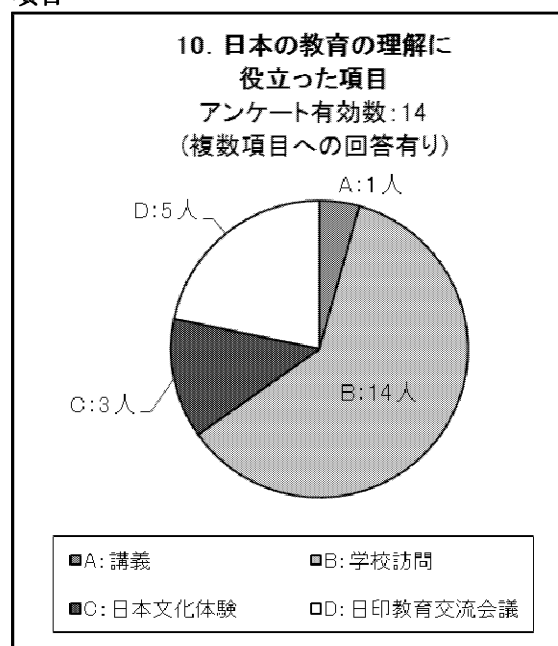
【どちらともいえない→非常に高い／高い】

- 参加する前は限りある情報しかなく、参加してからよりよく日本の教育について理解する機会を得られた。日本の学校は価値教育を生み、基本的な学問的教育、そしてスポーツや音楽に力をいれていることを知ることができた。それらから、私は日本の教育システムについて以前よりもよく理解していると思う。(A-11 サビハ・シェイク)
- 4校の学校見学を終え、日本の教育制度について知れたことはとても嬉しい。このプログラムの目的を達成できたと思う。(A-14 M.S. クマールサーミ)

【低い→非常に高い／高い】

- 以前は日本の教育システムについて知る機会が得られず、知識もあまりなかったが、文部科学省での講義、学校への訪問、交流会議を通して多くの知識を得ることができた。(A-3 メーガー・サクラン)
- プログラムに参加して、授業での教育法、スポーツ、音楽などを経験できた。(A-13 ソーハン・ラル)

質問 10. 日本の教育全般への理解に役立った項目



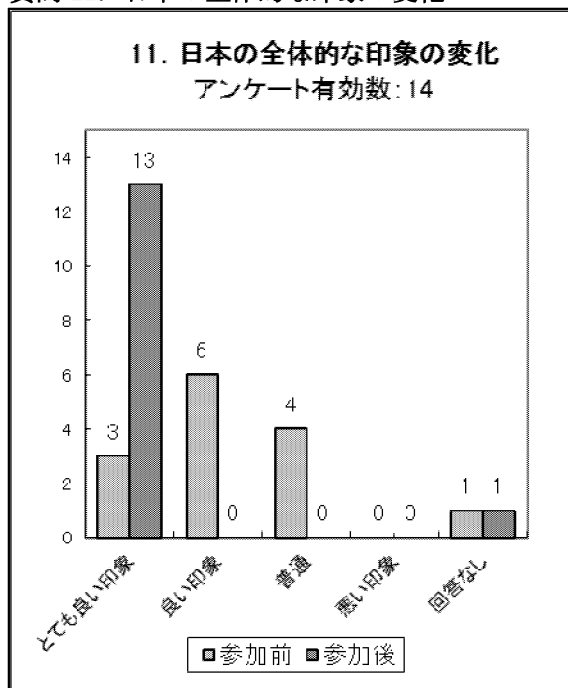
【講義】

- 文部科学省での講義により日本の教育についての理解が得られた。(A-3 メーガー・サクラン)

【学校訪問】

- 学校訪問をとおして、日本の教育システムを目の当たりにし、体験することができた。(A-4 R.P. ティワーリ)
- 今回、学校のさまざまなタイプについて、またそれぞれでの教育改善について理解できた。(A-10 ジェヌス・ジャイコブ)
- 学校でのほとんどの活動が体系的で良かった。(A-12 サンジーヴ・クマール)
- 学校訪問は日本の教育システムを理解するために一番いい場所だった。(A-13 ソーハン・ラル)

質問 11. 日本の全体的な印象の変化



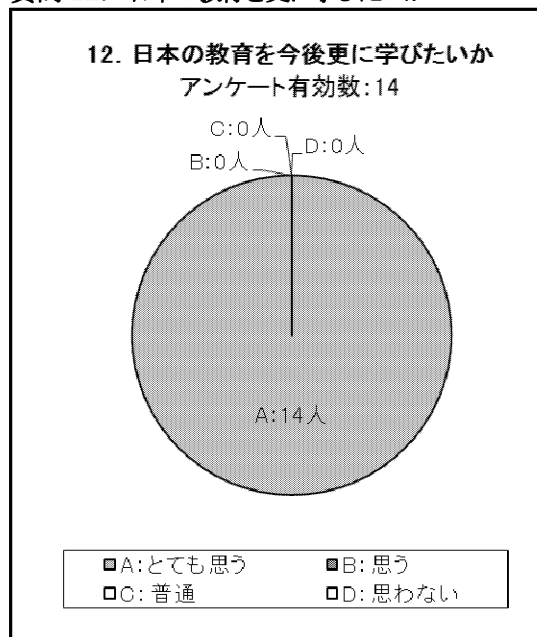
【とても良い／良い印象→とても良い印象】

- 日本と日本人に関する高い評価を耳にしていたので、前から印象はよかったが、実際に体験したあとは一層ようになった。(A-3 メーガー・サクラン)
- これまでも、またこれからも、日本の人々に対する敬意を抱き続けるだろう。(A-4 R.P. ティワーリ)
- 人々は大変礼儀正しく、慎み深く、常に笑顔で私たちを魅了した。日本の人々は常に他の人に手をさしのべようとする。(A-5 ミタリ)
- 日本文化の評判は聞いていた。日本文化の温かみはすべての人に心地よさを与えてくれる。(A-7 ヴェーヌ・アガルワール)
- 日本人は温かく、フレンドリーで文化的だと思う。それらの性格が彼らの美しい文化を生んだのだろう。(A-10 ジェヌス・ジャイコブ)

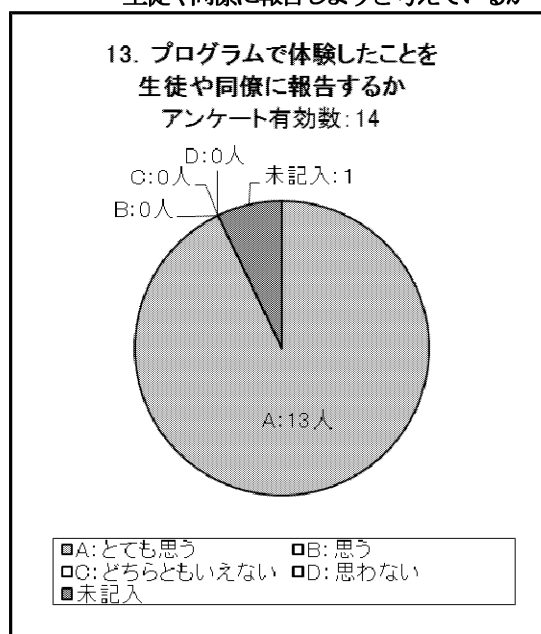
【普通→とても良い印象】

- 本プログラムに参加する前は日本に関する知識があまりなかったが、今では日本の人々、文化と慣習が好きになった。(A-6 サリター・マハラ)

質問 12. 日本の教育を更に学びたいか



質問 13. プログラムで体験したことを生徒や同僚に報告しようと考えているか



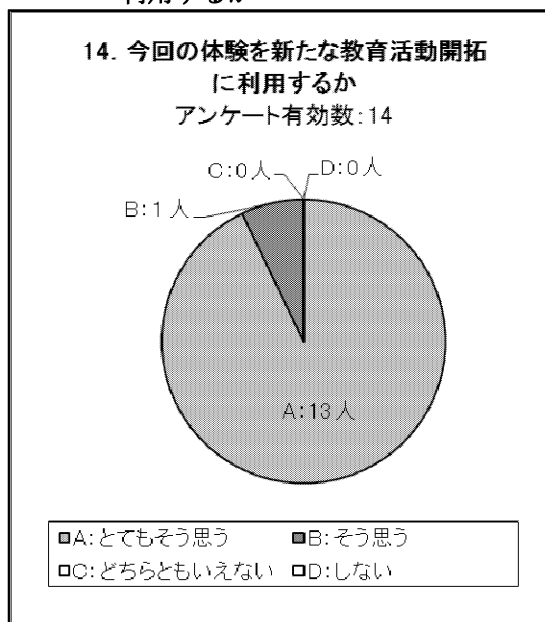
【とても思う】

- この体験を、CEE のウェブサイト、ニュースレター、教員養成ワークショップにおけるベストプラクティスのプレゼンテーションで共有する予定。(A-2 ケトキー・スチト・ガドレ)
- 帰国後、同僚のために今回の訪問についての報告会を予定している。多くの写真と教材を持ち帰って、グループ活動にお

いて共有する。(A-3 メーガー・サクラニ)

- 日本の教室の環境と教員・生徒のフレンドリーな関係が気に入ったので、そのことを伝え、自分も実践したい。(A-6 サリター・マハラ)
- 私の生徒と同僚が日本に関して、関心を抱くように、またその動機になるように報告したい。(A-8 A. カーシヴィスワナタン)
- このプログラムによってプラスになるように、学校の先生方にこのプログラムのことを説明し、写真を見せる予定。日本の心こもった振る舞いを伝え、刺激を与えたいと思う。(A-11 サビハ・シェイク)
- 特に清潔さ、時間を守ること、習慣、教育システムについて、日本訪問を通して学んだことを共有したい。(A-13 ソーハン・ラル)
- 国内の指導案計画者に、インドで導入・採択するために教育制度のメリットについて説明したい。(A-15 サントーシュ・クマール・ヴェルマー)

質問 14. 今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか



【とてもそう思う】

- インドの学校システムにおいて、生徒が先生に対して安心感を持ってもらえるようなクラス環境を実現できるよう取り組みたい。(A-1 ブラモード・クマール・

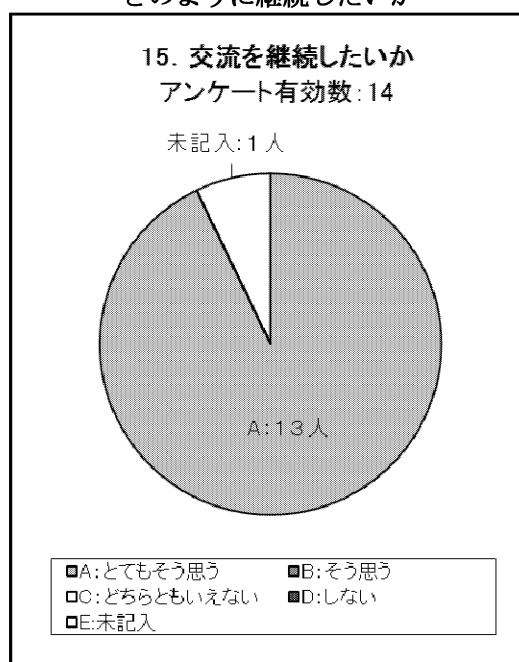
シャルマー)

- 良いと思った教育法を教員養成ワークショップに取り入れる予定。(A-2 ケトキー・スチト・ガドレ)
- 児童・生徒を中心とした活動＝「体験を通した学び」を取り入れたい。(A-5 ミタリ)
- 今回得た経験として、補助教材として音声や視覚教材をもっと使おうと思う。(A-13 ソーハン・ラル)

【そう思う】

- よりよい方法でのプレゼンテーション、生徒により自由を与えることを目標に取り組みたい。(A-7 ヴェーヌ・アガルワール)

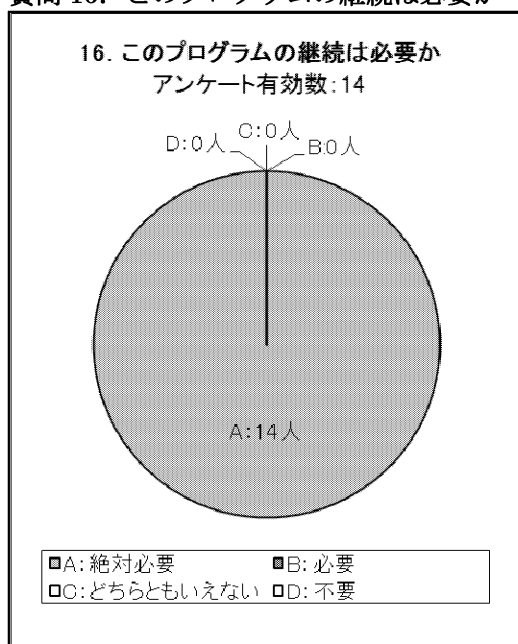
質問 15. 交流を継続したいか、どのように継続したいか



【とてもそう思う】

- 交流を継続させ、勤務先のサイエンス・センターが理数科教育のために開発したモデルと補助教材に関する情報を共有したい。(A-3 メーガー・サクラニ)
- 日本とインドの教職員・生徒で、衣食住をテーマに協働プロジェクトを実施したい。(A-10 ジェヌス・ジャイコブ)
- メールやウェブサイトを通じてすべての教員と交流したい。(A-14 M. S. クマールサーミ)

質問 16. このプログラムの継続は必要か



【絶対必要】

- プログラムを通して、最良の ESD 実践に関する洞察を促進し、それらをインドでも再現することができるため。(A-2 ケトキー・スチト・ガドレ)
- インド・日本両国の教員が互いに利益のある教授法を紹介し合い、両国の教育の質の向上につなげることができるため。(A-3 メーガー・サクラニ)
- 日本の教員と、互いの体験を共有する機会となった。このプログラムは、必ずインドにいる私たちの生徒たちにも裨益するだろう (A-4 R.P.ティワーリ)
- 日本のような既に先進国である国から多くのことを学ぶことができたため。(A-6 サリター・マハラ)
- 相互関係が生徒、ひいては国の発展を促進すると思う。(A-7 ヴェーヌ・アガルワール)
- もっと多くの先生がこのプロジェクトに興味を持つべき。(A-10 ジェヌス・ジャイコブ)
- 両国の先生方が相互に影響しあい、共に私たちの未来の世代のために働く機会を持てるため、絶対にこのプログラムを続けて欲しい。(A-11 サビハ・シェイク)
- このプログラムのおかげで、日本の教育制度やそのメリットを理解することができた。(A-15 サントーシュ・クマール・ヴェルマー)

2. 訪問受入れ機関

●千葉県立船橋北高等学校 教諭 稲田 敏志

プログラムの全体的印象

- 通訳の方がいなければ、インドの方の英語を理解するのは難しかったと思います。
- 積極的に授業を見学しており、関心の高さがうかがえました。
- 茶道体験に非常に感動していたので、実施してよかったと思います。

プログラム成果

- 「インドの学費は女子生徒の方が安い」「科学では身近で小さな事象から興味を持たせる」「英語以外の教科も英語で教える」等、新しい発見があり、参考になりました。

苦勞した点

- 理数系の先生方が参加されていたので、数学や理科科目を見学してもらおうと考えていましたが、来校日時（火曜日午後）には授業を展開していなくて困りました。また、学校行事との兼ね合いもあり、受入れは簡単ではありませんでした。
- インドの先生方が、どのようにして学校見学を希望しているのかが分からなかったので、自由に見学をしてもらうのか、教員の誘導で見学をするのかどちらがよいのか、迷いました。

プログラムの改善に向けた助言

- 質問シートや要望カード等、事前にテーマを絞る工夫ができれば、限られた時間を有効に使えるのではないかと感じました。

●広尾学園中学校・高等学校 教務開発統括部長 金子 暁

プログラムの全体的印象

- 大変熱心にご見学いただきました。インドの先生方との交流は初めての体験でしたが、とても良い機会をいただけたと感謝しています。インドはまさに多様性の文化だと思いますので、均質が重視される日本の学校や教育関係者にとって今後へのヒントを得られる機会だったと思います。

プログラム成果

- インドの先生方に本校の教育活動の多様性や研究室をはじめとした教育活動のための施設を見ていただけたことは日本の教育の再認識につながったのではないかと思います。

苦勞した点

- 同日に他の見学が入ってしまったこともあり、来校した先生方のプロフィールをじっくり確認できなかったことが反省点です。いただいた資料を十分に確認して、インドの学校教育をより深く理解していけば、さらに深い意味での交流が可能になっていくだろうと思います。

加えるとよいと思われる活動

- 本校でお見せできる教育活動はおおよそ見学いただけたのではないかと思います。

プログラムの改善に向けた助言

- これからも各国の先生方との交流の機会を得たいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

●荒川区立尾久宮前小学校

校長 伊藤 英夫

プログラムの全体的印象

- 新幹線プロジェクトをはじめ、日印は今後一層大切になっていくパートナーであると考えます。子供たちにもインドの生活や文化を説明し、様々な国と仲良く暮らしていく大切さを指導してきました。こうした機会を得て、言語や習慣を理解させることができましたことに感謝しています。

プログラム成果

- 日本の 10 倍を超える人々が、複数の言語と厚みのある文化をもって生活していることを学びました。特に「学校の様子は～です」と直接インドの先生方から子供たちにお話いただけたことがよかったと思います。
- 保護者会では「子供たちが大人になった時、経済大国になっているインドと一層関わりが深くなります。今から理解を深めておくことはよい経験になりました。」と話しました。地域・保護者の方々が大変興味をもってくださいました。

苦勞した点

- どうしても情報の伝達が早く届かないので準備に手間取りました。しかし丁寧に参加者名・言葉の違い・プレゼンの準備等を行っていただけましたので、お迎えの用意（名札や掲示物）には間に合いました。ACCU の方々には御苦勞をおかけしました。ありがとうございました。

加えるとよいと思われる活動

- こうした地道な交流を数多く繰り返していくことが大切だと感じます。受け入れ校として必要な準備があればお知らせください。
- 本校は「高橋尚子・スマイル・アフリカ」をやっている「運動くつを送ってくれてありがとう」とメールをいいた

だきました。ケニアと交流して子供たちは世界を実感しています。もしできるなら、世界各国現地の子供たちと交流したいと考えております。

プログラムの改善に向けた助言

- ACCU の方々の対応は適切でした。展開で疑問がある場合は遠慮なく学校に連絡をいただければ大丈夫です。いつでも協力できますのでご安心ください。

●お茶の水女子大学附属中学校
研究・帰国部部长 西平 美保

プログラムの全体的印象

- 教職員、生徒にとって大変有意義な機会となりました。特に生徒との交流の時間では、生徒のさまざまな質問に答えていただき、生徒にとってインドが身近になったかと思います。

プログラム成果

- インドの先生方と直接お話しができたことは有意義でした。また、インド式の掛け算の方法等も、生徒に直接お話しいただき、大変参考になりました。
- 生の **Indian English** が聞けたという経験は貴重だったと思います。**Japanese English** も自信を持っていけるのだと生徒は思ったようです。また、帰国生にとっては、英語を使える機会があって楽しかったようです。

苦労した点

- 特にありません。校務で忙しい教員も多く、準備や当日の対応については一部の教員で行っていたため、逆にご迷惑をおかけした点があるかもしれません。

加えるとよいと思われる活動

- 生徒との交流で、(小学校で授業をされたと後でお聞きしましたが) 海外の先生方に本校の生徒に直接授業をしていただくような交流もよいかと思います。
- インドの学校生活を撮影した **VTR** を生徒が見る時間があるとよいです。

プログラムの改善に向けた助言

- 授業視察と交流会の両方をプログラムに入れたので、時間が十分に確保できませんでした。特に生徒との交流は生徒にとって貴重な体験なので、十分に時間がとれるとよかったかと思います。幾つかの学校を視察するとなると、1校に長くは滞在できないかと思いますが、理想を言うと午前中から昼食を共にして、午後までゆったりと時間がと

れたらよかったかと思います。

- 1つの学校に丸々1日滞在して、各クラスにも入っていただき、お弁当も生徒と一緒に食べ、移動教室も一緒に動き、休み時間も生徒に混じる、という動きが良いのではないのでしょうか。

3. 事業主催者・担当者

●国際連合大学

サステナビリティ高等研究所
事務局長 古田 知美

11月6日から8日間という短いプログラムでしたが、首都圏における様々な取組をされている学校や教育文化施設への訪問を通じて、インド教職員訪問団の皆様には、日本の学校教育制度及びその現状について、多くのことを体験いただきました。私は千葉県船橋北高等学校の訪問に随行いたしました。教頭先生をはじめ教職員の皆様のおもてなしや、教室や廊下ですれ違う元気で明るい生徒たちの挨拶に、インドの教職員の皆様が大変感激されて、暖かい交流を深められていたことが印象的でした。また、すべての科目の授業が日本語で行われていることに驚かされていたインドの先生の様子を拝見し、改めて母国語以外に英語でも各教科の授業を行っているインドとの教育文化の違いを実感することができました。

今回の招へいプログラムによって、インドの教職員の皆様に日本の教育制度をご理解いただくばかりではなく、日本の学校関係者や児童生徒との交流を通じて、日本とインドの教育交流の推進に今後ともご尽力いただけることを願っています。本プログラムの実施にあたり、日本が誇る学校教育現場や教育機関をご視察いただくために、多大なご尽力を賜りました日本・インドの関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

●公益財団法人ユネスコ・アジア

文化センター
人物交流部 部長 進藤 由美

南アジア地域は近い将来世界経済の牽引役になるとも言われており、中でもインドの発展には目を見張るものがあります。注目度の高いインドが新たに国際教育交流事業に加わったことは画期的な出来事でした。

インドの教職員の皆様の参加意識はとても高く、各自が事前に立てた仮説を実証するかのように、丹念にそして大変楽しんでプログラムの一つ一つをこなされていました。また、受入校の日本の教職員や児童・生徒の皆様から温かいおもてなしを受け、インドの先生方は大変感銘を受けておりました。

特に意義深く感じられたのは、7日目に実施した「日印教育交流会議」です。学校訪問等を経たインドの教職員は様々な感想や疑問を持っており、それらを日本側の教職員に直接訊ねたり、話し合う機会となりました。一方、日本の教職員もこの機会を逃すまいと非常に高い意識を持って会議に参加されていました。このような時間と空間を提供させて頂けたことはACCU冥利に尽きます。今後、インド教職員招へいプログラムが益々有意義な事業として成長していくことをお約束します。

●公益財団法人ユネスコ・アジア

文化センター
人物交流部 高松 彩乃

今回が第一回目となるこの「インド教職員招へいプログラム」。教職員の招へいプログラムに関しては10年以上の実績をもつACCUですが、インドから14名という人数を招へいするのは初めてです。言語の問題は、食事は、どうしたらいいのか—すべてが初めての試みであり、インド側のパートナーであるCEEと共に手探りで進めていったプログラムでした。

日本の学校から積極的に学びたい、そしてそれと同時にインドのことをもっと知ってもらいたい、伝えたいという強い意志を持って参加された14名の訪問団。日本で出会った児童・生徒や先生方とその思いが相互に作用しあって、お互いの国がより近いものとなったことでしょう。これからも彼らの交流が続き、また新しい交流が生まれるよう、尽力したいと思います。

付録

1. 実施要項
2. プログラム日程
3. 参加者リスト
4. 関係機関リスト
5. 文部科学省講義資料
6. インドの教育に関する講義資料

◆付録 1. 実施要項

インド教職員招へいプログラム

(2016 年 11 月 6 日－13 日：東京近郊)

実 施 要 項

1. 背 景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) では、我が国とアジア太平洋地域の教職員間の交流を深め、相互理解と友好の促進に資するため、国際連合大学の委託を受け、2002 年より国際教育交流事業を実施してきた。

この国際教育交流事業では、これまでに韓国・中国・タイとの交流を行い、2016 年 2 月までに韓国からは延べ 1,877 名、中国からは 1,588 名、タイからは 15 名の教職員を招へいした。また、日本から訪韓した 519 名、訪中した 299 名の教職員と合わせ、日韓間、日中間、日タイ間の相互理解促進、学校間交流に大きく貢献してきた。

2016 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省 (MHRD)、Centre for Environment Education (CEE) の協力のもと、2016 年 11 月 6 日 (日) から 13 日 (日) までの 8 日間にわたりインド共和国から初等中等教育教職員約 15 名を本邦に招へいする「インド教職員招へいプログラム」を実施する。

2. 目 的

- (1) 日本の教育制度、学校教育の現状や特色ある取り組み (道徳、部活動など) をインド教職員に紹介する。
- (2) 学校等での意見交換を通じて、日印の教育の質を高める。
- (3) 日本の文化および社会全般に対する理解を深める。
- (4) 訪問する学校や施設などでの交流や日印教職員による教育交流会議を通じて、日印教職員の持続的なネットワークの構築、強化に寄与する。
- (5) 日印両国の相互理解と友好を促進する。

3. 日 程

本プログラムは、下記の日程で実施される予定である。

日付	日程	訪問先	活動
11 月 6 日 (日)	第 1 日	デリー出発	
11 月 7 日 (月)	第 2 日	日本到着	オリエンテーション 休憩・自由研修
11 月 8 日 (火) － 12 日 (土)	第 3－7 日	東京近郊	講義 学校訪問 (授業見学、教職員・児童生徒との交流) 日印教育交流会議 自由研修 文化施設訪問または日本文化体験
11 月 13 日 (日)	第 8 日	成田出発、デリー着	日本出発、デリー着

4. 参加者数

約 15 名

5. 参加資格

- (1) インド共和国の国民であること。
- (2) 所属する学校等からの推薦を受けた、インド共和国の初等中等教育 (初等学校・上級初等学校・中等学校・上級中等学校) もしくはノンフォーマル教育センターの教職員であること。(教育行政官及び教育専門家を含む)
- (3) プログラム参加中ならびに参加後も積極的に主に教育分野における日インド交流および国際相互理解を深める活動に取り組む姿勢を持つもの。
- (4) プログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) 英語での会話が可能であること。

なお、参加者は、①45 歳以下で教員経験 3 年以上のもの、②日本の教員、児童生徒、学校との交流を希望しているもの、③理数科もしくは道徳の教員であるものが望ましい。

6. 評価と報告

日本出発前(第 7 日)

- (1) 各参加者は ACCU の用意する評価票に記入する。

帰国後

- (2) 各参加者は報告書を作成し、CEE に提出する。CEE は報告書を取りまとめ、**2016 年 12 月 14 日(水)**までに ACCU に送付する。

7. 渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。

- (1) 往復航空運賃

インド国内の指定された国際空港と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。

- (2) 宿泊と食事

プログラム期間中の宿泊(朝食含)、およびプログラム期間中の食事。

食事が提供されない場合については食費を支給する。

- (3) 日本国内の移動旅費

プログラム期間中の、自由行動時以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

8. 海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

9. 通訳

公式プログラム期間中は原則として日本語と英語間の逐次通訳が行わる。

10. 申請・推薦手続

CEE は、参加者を選定し、**2016 年 9 月 2 日(金)**までに参加者リストおよび参加者のデータシート、パスポート控えを揃えて、ACCU へ推薦することとする。データシートの様式は ACCU より送付する。

11. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 人物交流部 担当:高松・有蘭

〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498

FAX: 03-3269-4510

E-MAIL: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆付録 2. プログラム日程

1st day /第 1 日	6th Nov. (Sun)	11 月 6 日 (日)
20:20	Departure from Indira Gandhi International Airport, Delhi (JL 740)	デリー (インディラ・ガンディー空港) 発 (JL740)
	night flight	当日の宿泊: 機内泊
2nd day /第 2 日	7th Nov. (Mon)	11 月 7 日 (月)
07:20	Arrival at Narita airport, Tokyo	東京 (成田空港) 着
08:30	Breakfast (N's Court in the airport)	朝食 (成田空港内 N's Court)
09:30	Leaving the airport	成田空港出発
11:00	Arrival at hotel and check-in	ホテル到着・チェックイン
12:30	Lunch time	昼食
13:30-15:00	Orientation (At TKP star conference room Toranomom)	オリエンテーション (TKP スター会議室虎ノ門)
15:00	Free and Dinner time (your own)	自由時間、夕食 (各自)
	Clothes on 7th: Casual wear	当日の服装: カジュアル
	Hotel on the 7th: Shinbashi Atagoyama Tokyu REI Hotel (Minato, Tokyo)	当日の宿泊: 新橋愛宕山東急 REI ホテル (東京都港区)
3rd day /第 3 日	8th Nov. (Tue)	11 月 8 日 (火)
10:40	Leaving the hotel	ホテル発
12:10	Lunch time	昼食
13:00-17:00	Visiting Funabashi Kita High School, Chiba (10, 11 and 12th graders)	千葉県立船橋北高等学校訪問
18:30	Arrival at the hotel and dinner time (your own)	ホテル着、夕食 (各自)
	Clothes on the 8th: Formal and Casual wear	当日の服装: ビジネスカジュアル
	Hotel on the 8th: Shinbashi Atagoyama Tokyu REI Hotel (Minato, Tokyo)	当日の宿泊: 新橋愛宕山東急 REI ホテル (東京都港区)

4th day /第 4 日	9th Nov. (Wed)	11 月 9 日 (水)
9:55	Leaving the hotel	ホテル発
10:15-11:30	Familiarization visit from Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology	文部科学省表敬訪問
	Greetings and exchanging souvenir	挨拶・記念品交換
	Lecture " The Elementary and Secondary Education in Japan "	講義「日本における初等中等教育について」
11:30	Leaving the Education ministry	文部科学省出発
	Lunch time	昼食
12:40-16:30	Visiting Hiroo Gakuen Junior and Senior High School(7th to 12th graders)	広尾学園中学校・高等学校訪問
17:00	Arrival at the hotel and dinner time (your own)	ホテル着、夕食(各自)
	Clothes on the 9th: Formal wear	当日の服装: ビジネス
	Hotel on the 9th: Shinbashi Atagoyama Tokyu REI Hotel (Minato, Tokyo)	当日の宿泊: 新橋愛宕山東急 REI ホテル(東京都港区)
5th day /第 5 日	10th Nov. (Thu)	11 月 10 日 (木)
8:00	Leaving the hotel	ホテル発
9:00-12:00	Visiting Ogumiyamae Elementary School, Tokyo (1st to 6th graders)	東京都荒川区立尾久宮前小学校訪問
12:00-13:00	Lunch time	昼食
13:30-16:30	Visiting Junior High School of Ochanomizu University (7, 8 and 9th graders)	お茶の水女子大学附属中学校訪問
17:00	Arrival at the hotel and dinner time (your own)	ホテル着、夕食(各自)
	Clothes on the 10th: Formal and Casual wear	当日の服装: ビジネスカジュアル
	Hotel on the 10th: Shinbashi Atagoyama Tokyu REI Hotel (Minato, Tokyo)	当日の宿泊: 新橋愛宕山東急 REI ホテル(東京都港区)

6th day /第 6 日	11th Nov. (Fri)	11 月 11 日 (金)
9:30	Leaving the hotel	ホテル発
9:40	Arrival at Hinodesanbashi	日の出棧橋到着
10:00-10:40	Going from Hinodebashi to Asakusa by a ship	船で移動: 日の出棧橋～浅草
10:40	Arrival at Asakusa (free)	浅草到着 自由時間
13:15-14:15	Lunch time	昼食
14:30-16:30	Visiting Edo-Tokyo museum	江戸東京博物館見学
	Arrival at the hotel and dinner time (your own)	ホテル着、夕食(各自)
	Clothes on the 11th: Casual wear	当日の服装: カジュアル
	Hotel on the 11th: Shinbashi Atagoyama Tokyu REI Hotel (Minato, Tokyo)	当日の宿泊: 新橋愛宕山東急 REI ホテル(東京都港区)
7th day /第 7 日	12th Nov. (Sat)	11 月 12 日 (土)
8:15	Leaving the hotel	ホテル発
9:00-9:30	Answering a questionnaire of this Program	プログラムアンケート記入
10:00-16:00	Japan and India Educational Exchange meeting (Including Lunch time)	日印教育交流会議(昼食休憩含む)
16:45	Arrival at the hotel and dinner time (your own)	ホテル着、夕食(各自)
	Clothes on the 12th: Formal and Casual wear	当日の服装: ビジネスカジュアル
	Hotel on the 12th: Shinbashi Atagoyama Tokyu REI Hotel (Minato, Tokyo)	当日の宿泊: 新橋愛宕山東急 REI ホテル(東京都港区)
8th day /第 8 日	13th Nov. (Sun)	11 月 13 日 (日)
8:00	Leaving the hotel and check-out	チェックアウト・ホテル出発
9:30	Arrival at Narita airport and check-in	成田空港到着・チェックイン
11:45	Departure from the airport, Tokyo (JL749)	東京(成田空港)発(JL749)
18:20	Arrival at Indira Gandhi International Airport, Delhi	デリー着

◆付録 3. 参加者リスト

★団長: A-1 Mr. PRAMOD KUMAR SHARMA

No	Name(Eng)	Name(JP)	Sex (M/F)	School/Org Name(Eng)	Title	Subjects	City/Province
A-1	★Pramod Kumar Sharma	プラモード・クマール・シャルマー	M	Centre for Environment Education	Sr. Programme Coordinator	Environment, Sustain-ability, Science	Ahmedabad, Gujarat
A-2	Ketki Suchit Gadre	ケトキー・スチト・ガドレ	F	Centre for Environment Education	Programme Officer	Waste Management	Ahmedabad, Gujarat
A-3	Megha Saklani	メーガー・サクラニ	F	Vikram A. Sarabhai Community Science Centre	Programme Officer-Scientist C	Science	Ahmedabad, Gujarat
A-4	R. P. Tiwari	R. P. ティワール	M	Jawahar Navodaya Vidyalaya, Umari	Post Graduate Teacher	Mathematics	Umari, Madhya Pradesh
A-5	Mitali	ミタリ	F	Jawahar Navodaya Vidyalaya, Munger	Trained Graduate Teacher	Science	Patna, Bihar
A-6	Sarita Mahala	サリター・マハラ	F	Jawahar Navodaya Vidyalaya, Alwar	Post Graduate Teacher	Physics	Alwar, Rajasthan
A-7	Venu Agarwal	ヴェーヌ・アガルワール	F	Carmel Convent Sr. Sec. School	Sr. Post Graduate Teacher	Chemistry	Bhopal, Madhya Pradesh
A-8	A. Kasiviswanathan	A. カーシヴィスワナタン	M	The Hindu Senior Sec. School	Vice-Principal	Physics	Chennai, Tamil Nadu
A-9							
A-10	Jainus Jacob	ジェヌス・ジャイコブ	F	Kendriya Vidyalaya Thrissur	Primary Teacher	Environment Studies, English, Hindi	Thrissur, Kerala
A-11	Sabiha Shaikh	サビハ・シェイク	F	Kendriya Vidyalaya No. 1, Surat	Post Graduate Teacher	Chemistry	Surat, Gujarat
A-12	Sanjeev Kumar	サンジーヴ・クマール	M	Kendriya Vidyalaya No 1, Ambala Cantt	Post Graduate Teacher	Physics	Ambala Cantonment, Haryana
A-13	Sohan Lal	ソーハン・ラル	M	Kendriya Vidyalaya No. 2 AFS, Jodhpur	Post Graduate Teacher	Physics	Jodhpur, Rajasthan
A-14	M.S. Kumarswamy	M. S. クマールサーミ	M	Kendriya Vidyalaya Gachibowli	Trained Graduate Teacher	Mathematics	Hyderabad, Telangana
A-15	Santosh Kumar Verma	サントーシュ・クマール・ヴェルマー	M	Department of School, Education and Literacy, Ministry of Human Resource Development	Under Secretary, Government of India	Mathematics	New Delhi City



国際統括官の森本氏（前列中央）を囲んで（文部科学省）



訪問団団長のプラモード氏（尾久宮前小学校）



日印教育交流会議にて（日本出版会館）



施設見学をする訪問団（広尾学園）



移動中のバスの中で



授業見学（船橋北高等学校）



チャイをいただく様子（船橋北高等学校）



教室内のクラスメート紹介にも興味津々（広尾学園）



和室見学（広尾学園）



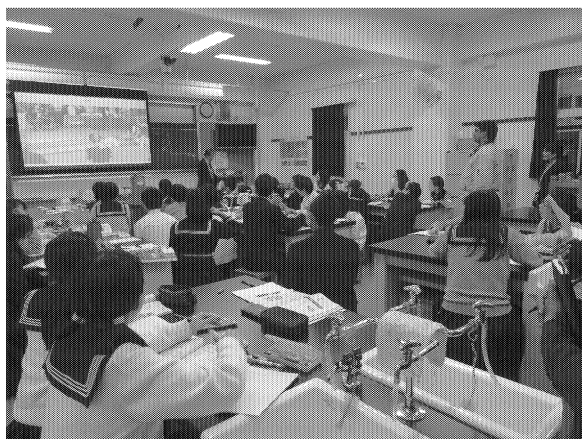
学校でいただいた地元のお菓子（尾久宮前小学校）



全校児童による「八木節」披露の後で、全員での記念撮影（尾久宮前小学校）



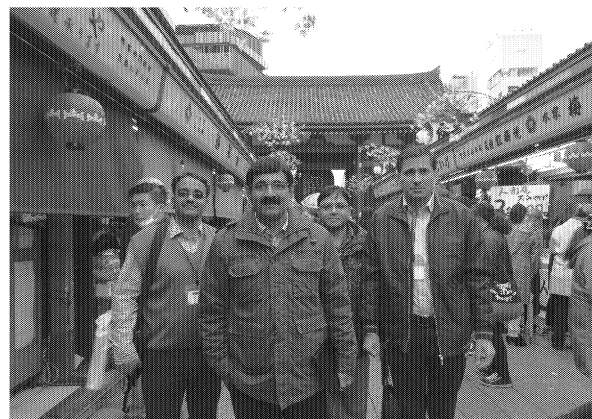
図書室訪問（お茶の水女子大学附属中学校）



実験室見学（お茶の水女子大学附属中学校）



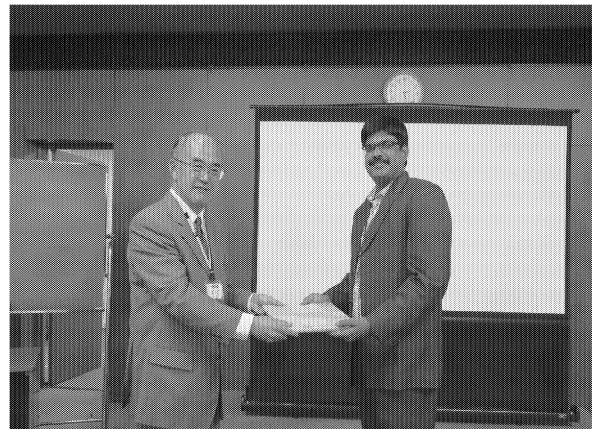
浅草に向かう船で



浅草にて



日印教育交流会議ディスカッション



プログラム修了証の授与



日本・インド教職員での集合写真



神楽坂で伝統文化の催しを見学

◆付録 4. 関係機関リスト

United Nations University (UNU) / 国際連合大学

5-53-70 Jingumae Shibuya-ku, Tokyo 150-8925

〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70

TEL: 03-5467-1212 FAX: 03-3499-2828 URL: <http://unu.edu/>

Ph.D TAKEMOTO Kazuhiko

Director, UNU-Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)

竹本 和彦

国際連合大学 サステイナビリティ高等研究所 所長

Ms. FURUTA Tomomi

Administrative Director, UNU-Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)

古田 知美

サステイナビリティ高等研究所 事務局長

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) / 文部科学省

3-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8959

〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3 丁目 2 番 2 号

TEL: +81-3-5253-4111 URL: <http://www.mext.go.jp>

Mr. MINAMI Tetsuhito

Deputy Director, International Affairs Division, Minister's Secretariat

南 哲人

大臣官房国際課 課長補佐

Ms. CHUMAN Ai

Unit Chief, Office for International Strategy Planning,
International Affairs Division, Minister's Secretariat

中馬 愛

大臣官房国際課国際戦略企画室 海外協力政策係 係長

Embassy of India / インド大使館

2-2-11 Kudan-Minami, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0074

〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-2-11

TEL: +81-3-3262-8520 Fax: +81-3-3263-5285 URL: <http://www.indembassy-tokyo.gov.in/home.html>

Ms. MUANPUII Saiawi

First Secretary (Information, Education & Culture)

ムアンプイ サイオイ

一等書記官(情報・教育・文化)

School Visit Hosts

学校訪問でご協力いただいた方々

Funabashi-Kita High School / 千葉県立船橋北高等学校

133-1, Jinboucho, Funabashi City, Chiba Prefecture, 274-0056

〒274-0056 千葉県船橋市神保町 133-1 <http://cms1.chiba-c.ed.jp/funabashikita-h/>

TEL: 047-457-3115

Mr. NEMOTO Kenichi

Principal

根本 憲一

校長

Mr. INADA Satoshi

Teacher

稲田 敏志

教諭

Hiroo Gakuen Junior & Senior High School / 広尾学園中学校・高等学校

5-1-14, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo, 106-0047, Japan

〒106-0047 東京都港区南麻布 5-1-14

TEL: 03-3444-7271 <http://www.hiroogakuen.ed.jp/>

Mr. TANABE Hiroshi

Principal

田邊 裕

校長

Mr. KANEKO Satoru

Educational Programme Director

金子 暁

教務開発統括部長

Ogumiyamae Elementary School / 荒川区立尾久宮前小学校

1-4-17 Nishiogu, Arakawa-ku, Tokyo, 116-0011

〒116-0011 東京都荒川区西尾久 1-4-17

TEL: 03-3893-3536 <http://www.aen.arakawa.tokyo.jp/OGUMIYAMAE-E/>

Mr. ITO Hideo

Principal

伊藤 英夫

校長

Mr. SEKIKAWA Hiroshi

Vice Principal

関川 浩

副校長

Junior High School of Ochanomizu University / お茶の水女子大学附属中学校

2-1-1, Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8610

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

TEL: 03-5987-5864

Ms. KAGAMI Tomiyo

Principal

加賀美 常美代

校長

Mr. KOIZUMI Kaoru

Vice Principal

小泉 薫

副校長

Ms. NISHIHIRA Miho

Head of Research/Returnee students Division

西平 美保

研究・帰国部部長

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
Japan Publishers Building, 6 Fukuromachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8484
〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510
Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp URL: <http://www.accu.or.jp>

Mr. TAMURA Tetsuo
Director-General
田村 哲夫
理事長

Mr. HORIE Shin'ichiro
Secretary-General
堀江 振一郎
事務局長

Ms. SHINDO Yumi
Director, International Exchange Department
進藤 由美
人物交流部 部長

Ms. TAKAMATSU Ayano
Programme Officer, International Exchange Department
高松 彩乃
人物交流部 事務専門員

Ms. ARIZONO Yoshiko
Programme Officer, International Exchange Department
有薗 佳子
人物交流部 事務専門員

Mr. SAITO Seigo
Programme Officer, International Exchange Department
齋藤 盛午
人物交流部 事務専門員

Ms. KAWAGUCHI Eriko
Programme Officer, International Exchange Department
河口 枝里子
人物交流部 事務専門員

◆付録 5. 文部科学省講義資料

日本の初等中等教育の概要

文部科学省 初等中等教育局
市川 清治
平成28年11月9日

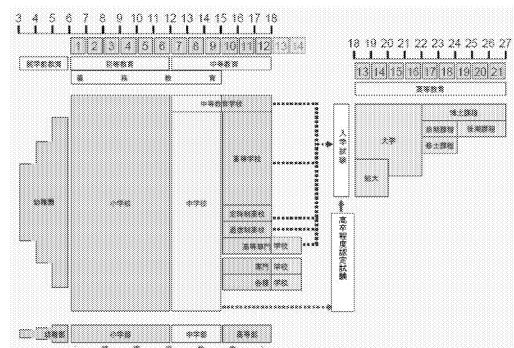


講演の構成

- I. 日本の初等中等教育制度……………3
- II. 日本の教育政策の一部の紹介……………14

I. 日本の基本的な初等中等教育制度

学校体系

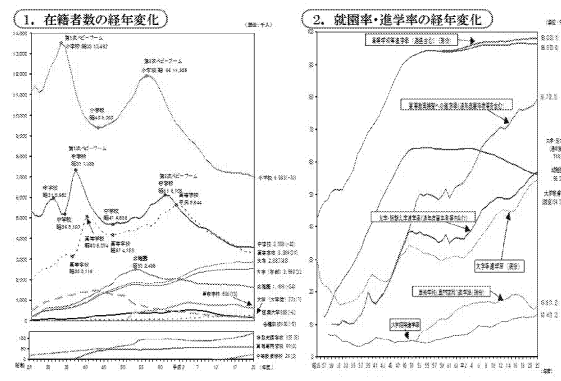


学校数、生徒、教員数

	学校数	生徒数	教員数
幼稚園	11,700	140万人	10万人
小学校 6 年	20,600	654万人	42万人
中学校 3 年	10,400	347万人	25万人
高等学校 3 年	5,000	330万人	24万人
中等教育学校 6 年	50	3万人	2,500
特別支援学校	1,100	14万人	8万人

出典：平成27年度 学校基本調査

在籍者数、就園率・就学率の経年変化



義務教育制度の概要

憲法

第26条 すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

教育基本法

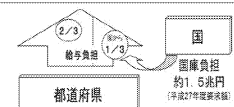
第5条 国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

- 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。
- 国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。
- 国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。

義務教育費国庫負担制度の概要

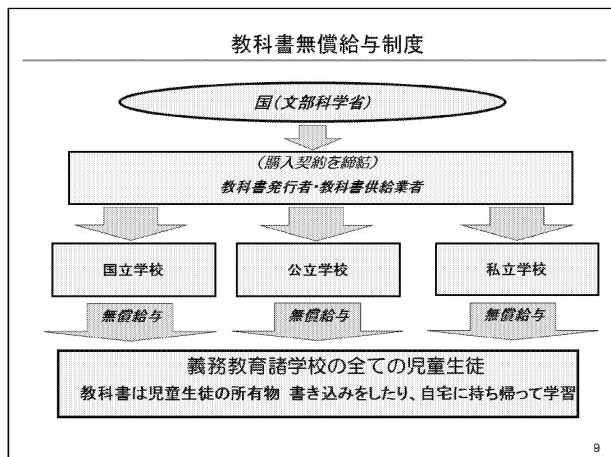
- 憲法の要請に基づき、義務教育の根幹(機会均等、水準確保、無償制)を国が責任をもって支える制度。
- 市町村が小中学校を設置・運営。
- 都道府県が教職員を任命し、給与を負担。
- 国は教職員給与費の1/3を負担。

公立義務教育諸学校の教職員の給与費(総額約4.5兆円)
(約92.7万人、小中学校41.4万人、中学校24.2万人、特別支援学校4.3万人)



【教員の給与】

- 人材確保法は、教員に優れた人材を確保し、もって義務教育水準の維持向上を図ることを目的として、教員の給与を一般の公務員より優遇することを定めている。



9

教員養成・免許制度の概要

【免許主義】

教員は、教育職員免許法により授与される各相当の免許状を有する者でなければならない。

【教員養成・採用・研修等の各段階を通じた教員の資質向上】

養成

- 大学における養成が原則
- 教職課程の設定を受けた学科等において、教科に関する科目、教職に関する科目などを修得することにより、採用当初から学級や教科を担任し、教科指導、生徒指導等を実践するために必要な基礎的な資質能力を養成

採用

- 都道府県・指定都市教育委員会等において採用選考試験を実施
- 多面的な人物評価の一層の推進
 - ・面接試験・実技試験の重視
 - ・様々な社会体験等の評価

適切な人事管理

- 指導が不適切な教員に対する人事管理システム の適切な運用
- 教員評価システム ● 優秀教員表彰

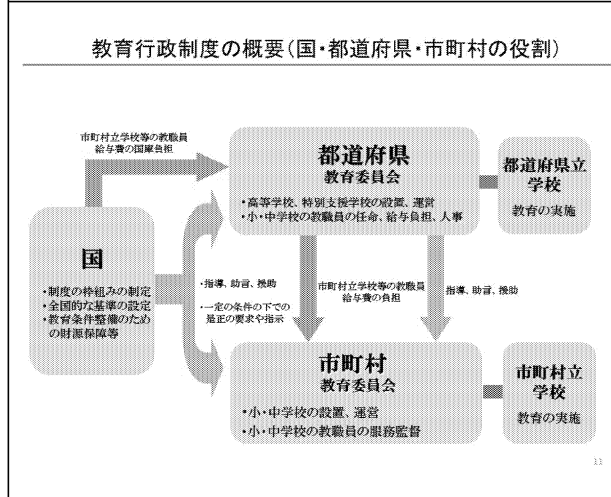
研修

- 都道府県教育委員会等における研修
 - ・初任者研修・10年経過後研修 等
- 国(教員研修センター)における研修
 - ・各地域において中心的な役割を担う教職員に対する 学校運営研修
 - ・職業の重要課題研修 等

免許更新制

- 教員が定期的に最新の知識技能を身につけることで教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることが目的
- 免許状に10年の有効期間を定める

10



11

学習指導要領とは

全国どの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようにするため、文部科学省では、学校教育法等に基づき、各学校で教育課程(カリキュラム)を編成する際の基準を定めています。これを「学習指導要領」といいます。

「学習指導要領」では、小学校、中学校、高等学校等ごとに、それぞれの教科等の目標や大まかな教育内容を定めています。また、これは別に、学校教育法施行規則で、例えば小・中学校の教科等の年間の標準授業時数等が定められています。各学校では、この「学習指導要領」や年間の標準授業時数等を踏まえ、地域や学校の実態に応じて、教育課程(カリキュラム)を編成しています。

確かな学力

基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良い問題を解決する資質や能力

【生きる力】

自らを律し、つとめ、他人を思いやる心、たくましく生きるための健康や体力、豊かな心、健やかな体

現行学習指導要領においては、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、「生きる力」を育成

12

学習指導要領改訂の視点

新しい時代に必要となる資質・能力の育成

①「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」
各教科等に関する個別の知識や技能など、身体的技能や芸術表現のための技能等も含む。

②「知っていること」をどう使うか(思考力・判断力・表現力等)
主体的・協働的に問題を発見・解決していくために必要な思考力・判断力・表現力等。

③「どのよう社会・世界と関わり、よい人生を送るか(人間性や学びに向かう力等)」
①や②の力が働く方向性を決定付ける情意や態度等に関わるもの。以下のようなものが含まれる。
・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力、自己感情や行動を統制する能力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。
・多様性を尊重する態度と互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会作りに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、(愛)しさや思いやりなど

何ができるようになるか

育成すべき資質・能力を育む観点からの学習評価の充実

何を学ぶか

育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

- ◆ グローバル社会において不可欠な英語の能力の強化(小学校高学年での教科化等)や、我が国の伝統的な文化に関する教育の充実
- ◆ 国家・社会の責任ある形成者として、また、自立した人間として生きる力の育成に向けた高等学校教育の改訂(地理・歴史・公民の設置等、新たな共通必修科目の設置や科目構成の見直しなど抜本的な検討を行う。)

どのように学ぶか

アクティブ・ラーニングの観点からの不断の授業改善

- ◆ 習得・活用・探究という学習プロセスのなかで、問題発見・解決を必要とする学びの過程が実現できているかどうか
- ◆ 自身の思考や成果と他者との相互作用を通じて、自分の考えを上げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか
- ◆ 子供たちが自主的に学び、主体的に学ぶ過程が実現できているかどうか

13

小中学校の標準授業時数

小学校の各教科等の時数(1週当たり)

	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語 活動	総合的な 学習の時間	特別 活動	合計	
1年生	9	-	4	-	3	2	2	-	3	1	-	-	1	25	
2年生	9	-	5	-	3	2	2	-	3	1	-	-	1	26	
3年生	7	2	5	2.6	-	1.7	1.7	-	3	1	-	2	1	27	
4年生	7	2.6	5	3	-	1.7	1.7	-	3	1	-	2	1	28	
5年生	6	2.9	5	3	-	1.4	1.4	1.7	2.6	1	1	2	1	28	
6年生	5	3	5	3	-	1.4	1.4	1.6	2.6	1	1	2	1	28	
合計時間 数	146	36	101	1	405	207	358	358	115	597	209	70	280	209	5645

中学校の各教科等の時数(1週当たり)

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術・ 家庭	外国 語	道徳	総合的な 学習の時間	特別 活動	合計
1年生	4	3	4	3	1.3	1.3	3	2	4	1	1.4	1	29
2年生	4	3	3	4	1	1	3	2	4	1	2	1	29
3年生	3	4	4	4	1	1	3	1	4	1	2	1	29
合計時間 数	385	350	385	385	115	115	315	175	520	105	190	105	3045

14

14

道徳教育用教材「私たちの道徳」を活用した道徳の時間の事例

特定の価値観を押し付けるのではなく、発達の段階に応じて、多様な価値観の時に対立がある場合を含めて誠実にその価値に向き合い、道徳的な問題を考え続ける姿勢を養う。

● 小学校6・6年

「権利とは、義務とは何だろう」

権利にも、義務を果たすことによって考えさせる。

What are the Rights and the Obligations?

Each of us has our rights and the obligations to live together in our society.

Rights

The authorities in a democratic society are bound to respect our rights and to protect them.

Obligations

The things that we are bound to do are called obligations.

What will happen if someone only claims his/her rights and does not respect the rights of others?

What will happen if someone only respects the rights of others and does not claim his/her rights?

What will happen if someone only respects the rights of others and does not claim his/her rights?

We all have the right to live in a better society. We all have the obligation to make a better society.

● 中学校

「あなたはどう考え、行動しますか」

杉原千景氏の「命のパスポート」を題材に、人間としての誇りある生き方について考えさせる。

「この人に学ぶ『コーム』」

ガンディーの生き方に学ぶ。

What are the Rights and the Obligations?

Each of us has our rights and the obligations to live together in our society.

Rights

The authorities in a democratic society are bound to respect our rights and to protect them.

Obligations

The things that we are bound to do are called obligations.

What will happen if someone only claims his/her rights and does not respect the rights of others?

What will happen if someone only respects the rights of others and does not claim his/her rights?

What will happen if someone only respects the rights of others and does not claim his/her rights?

We all have the right to live in a better society. We all have the obligation to make a better society.

Ⅱ. 日本の教育政策の一部の紹介 高大接続について

「高大接続改革」の必要性

- 国際化・情報化の急速な進展
→ 社会構造も急速に、かつ大きく変革。
 - 知識基盤社会のなかで、新たな価値を創造していく力を育てることが必要。
 - 社会で自立的に活動していくために必要な「学力の3要素」をバランスよく育むことが必要。
- 【学力の3要素】
- ① 知識・技能の確実な習得
 - ② ①を基にした「思考力、判断力、表現力」
 - ③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

学力の3要素を多面的に評価する
大学入学選抜

高等学校教育・大学教育・大学入学選抜
抜本的・体系的改革（高大接続改革）

学力の3要素を育成する
高校教育

高校までに培った力を更に
向上・発展させ、社会
に送り出すための大学
教育

「高大接続改革」

○「高大接続改革」とは何か。

- ◆ 大学入試改革も含まれているが、それだけではない。
- ◆ ①「高等学校教育」と、
- ②「大学教育」、
- ③両者を接続する「大学入学選抜」、
- 連続した1つの軸として、一体的に改革するもの。

○なぜ「高大接続改革」なのか。（なぜ三者一体なのか。）

- ◆「高等学校教育」と「入学選抜(大学入試)」は一緒に変わる必要。
 - ・大学入試が変わらないと高校教育が変わらない、
 - ・受験圧力の低下と高校生の学修量の低下、等
- ◆ 少子化・国際競争の進展の中で、大学教育の質的転換(しっかりと学ぶ大学教育へ)
 - ・大学教育を受けるに足る入学者の選抜
 - ・多様な入学者とそれに合わせた教育プログラムの必要性、等

高大接続改革の全体像イメージ

「高大接続システム改革会議最終報告（平成30年3月）より」
「高等学校教育」「大学教育」「大学入学選抜」の一体的改革による「学力の3要素」の伸長

高等学校教育改革（「学力の3要素」の確実な育成）

✓学習指導要領の抜本的な見直し

- ・育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の見直し
- ・「基礎・基本（知識）」、「思考力・判断力」、発展的・創造力を育成する（思考力・判断力）
- ・「知識・技能」「思考力・判断力」の育成・評価の観点

✓学習・指導方法の改善

- ・アクティブラーニングの観点からの学習・指導方法の改善
- ・教員の養成・採用・研修の見直し

✓多面的な評価の推進

- ・多面的な学業成果を測定するツールの充実
- ・「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入
- ・「学力の3要素」の育成・評価の観点から、授業・学習方法の改善・評価方法の改善
- ・「学力の3要素」の育成・評価の観点から、授業・学習方法の改善・評価方法の改善

✓「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入

- ・「学力の3要素」の育成・評価の観点から、授業・学習方法の改善・評価方法の改善

個別入学選抜の改革

- ① 明確な「入学希望者の方針」に基づき
- 「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する選抜へ改善
- ・「学力の3要素」の育成・評価の観点から、授業・学習方法の改善・評価方法の改善
- ・「学力の3要素」の育成・評価の観点から、授業・学習方法の改善・評価方法の改善

大学入学選抜改革

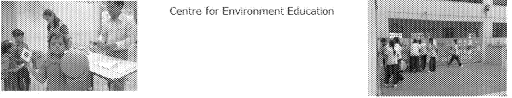
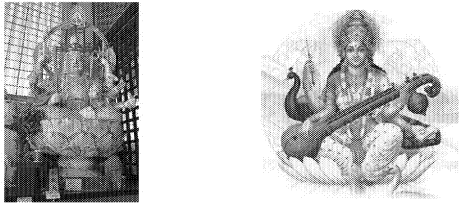
✓三つの方針（卒業認定・学位授与、教育課程編成・実施、入学選抜）に基づき、大学教育の質的転換

- ・関係省庁の改正（三つの方針）の一貫した推進（平成30年度～平成32年度）
- ・「三つの方針」の推進・運用に関する「参考指針」の作成（平成30年度）
- ・各大学において育成を目指す人材像や具体的な教育活動の明確化
- ・入学から卒業までの、大学教育を充実するためのPODCAサイクルを強化

✓認証評価制度の改善

- ・高大接続改革の推進を踏まえた評価項目・方法の改善（三つの方針）
- ・「三つの方針」の推進・運用に関する「参考指針」の作成（平成30年度）
- ・各大学において育成を目指す人材像や具体的な教育活動の明確化
- ・入学から卒業までの、大学教育を充実するためのPODCAサイクルを強化

◆付録 6. インドの教育に関する講義資料

 インドの教育制度 インド共和国における教育 2016-2017年 インド教職員招へいプログラム Pramod Kumar Sharma Senior Programme Coordinator Centre for Environment Education 	学問の女神 すべての「流れるもの」——水、言葉（広義の知識）、評論、 羅列さ、音楽など——を司る女神  弁財天 サラスワティー (Saraswati)
教育の歴史 ・ ガンダーラ王国・タクシラー (Taxila) 紀元前7世紀～紀元6世紀の古代インド（現代パキスタン領）で興隆。ヴェーダ聖典、文法学、哲学、天文学、医学、外科、政治学、弓矢での攻撃法、音楽、商業など68科目が教えられていた。 ・ ナーランダ (Nalanda) 紀元6～11世紀に栄え、外部の侵略により滅亡。300もの講義のための広間、実証室、図書館、講壇台が存在。中国人旅行者の記録によると、1万人の生徒を200人の教授が教えていた。 ・ 仏教僧院とともに世俗の機関も出現、医学など実学教育を行った。 ・ サマナ (診門) やプラーフマナ (バラモン) のグル (師) たち 彼らは、教授料の徴収や生徒・保護者からの料金の徴収といったものではなく、布施を得て教育を行った。同僚僧侶のサマナ (Samanana) が宗教、哲学、その他の科目を学ぶ一方、戦士階級の クシャトリア (Kshatriya) は戦いについて鍛えられた。商人階級 ヴァイシャ (Vaishya) は商売を学び、労働階級の シュードラ (Shudra) は一般に教育の恩恵を受けることを許されなかった。 'Swadeshe pujiyate raja, vidwan sarvatra pujiyate' 「王が尊ばれるのはその国のみでだが、学識ある者は世界中で尊ばれる」 	師弟制度 (guru-shishya) またはパランパラ parampara (「継承」)は、インドの伝統的文化および宗教（ヒンドウ教、ジャイナ教、仏教（チベット仏教および禅））においてみられる、師から弟子へと引き継がれる伝承を指す。  विद्या ददाति विनये विनयादाति पात्रताम् । पात्रत्वाद्वत्तमाप्नोति धनाद्धर्मं ततः सुखम् ॥ (真の/完全な)知識は規律をもたらす。規律からは徳徳が生まれ、徳徳から人は富を得、富から(人は)善行を行い、そこからは喜び(が生まれる)
憲法による規定 現行憲法における教育に関する条項 第25条 技術訓練、医科大学を含める教育はリストIの63, 64, 65項（職業訓練・技術研修）に従うものとする。 インド国憲法第45条: 「国と州は、憲法施行から10年以内に14歳までのすべての子どもに無償義務教育を提供する努力をすること」 6～14歳の者は教育を受ける基本的な権利を有する しかし、この指針原則の履行は、明白な構造的かつ実質的困難を帯びているため、またインド国憲法において経済的制限を規定した唯一の指針原則であるため、議論的かつ疑問的である。	・ インド国憲法 第46条による規定： 国と州は、特段の配慮をもって、脆弱層の人々、指定カースト（*元不可触民）および指定部族（*先住民族）の教育的かつ経済的利益を促進し、また、それらの人々を社会的不正義およびあらゆる形態の社会的搾取から保護すること。  宗教的・言語的マイノリティーが教育機関を設立・運営する権利（第30条） 
第21条A項: 国と州は、州法が定める形態に従い、無償かつ義務的な教育を、6歳から14歳までのすべての児童に与えること。 	「無償義務教育に関する子どもの権利法」2009年 ・ 「無償義務教育に関する子どもの権利法 (RTE)」はインド国憲法第21条A項に定められた、6～14歳の児童のための無償義務教育の重要性を規定するインド議会法（2009年8月4日制定；2010年4月1日施行） ・ 本法案により、インドはすべての児童にとって教育が基本的権利である135か国の仲間入りを果たした 

- 国は、1968年および1986-1992年の教育政策において、教育を国の発展のための必須条件とし、**平等、近接性（アクセシビリティ）、質**を3つの重要課題に定めた。



人的開発資源省（MHRD）認可の 学校教育機関

- Central Board of Secondary Education (CBSE)
- Central Institute of Education Technology (CIET)
- Central Tibetan School Administration (CTSA)
*亡命チベット政府が運営する学校
- Kendriya Vidyalaya Sangathan (KVS)
*中央政府公務員の子供対象の学校
- National Bal Bhawan
- National Council for Educational Research and Training (NCERT)
 - State Council of Educational Research and Training (SCERT) *州の教育研究機関
 - District Institute of Education and Training (DIET) *県の教育機関
- National Institute of Open Schooling (NIOS)
- Navodaya Vidyalaya Samiti (NVS)
*ギフテッド教育認定校
- National Council for Teacher Education (NCTE)
- National University of Educational Planning and Administration (NUEPA)

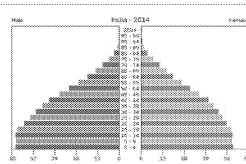
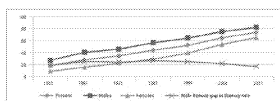
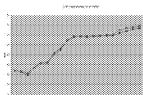
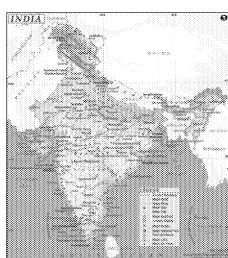
高等教育

- 大学助成委員会（University Grants Commission, UGC）**
大学教育の最低水準の維持・調整
- 国家認定評価審議会（National Assessment and Accreditation Council, NAAC）**
1994年設立。大学およびその関連カレッジの質の評価および認定
- インド全国技術教育審議会（All India Council for Technical Education, AICTE）**
1987年設立。国内の技術教育の発展を計画・調整
- 国家認定委員会（National Board of Accreditation, NAB）**
国内の技術機関の評価・認可およびその資格の認定および認定取り消しにあたっての推薦

インドと日本の比較（概要）

	インド	日本
人口（2016年：人）	13億1千万	1億2千万
人口密度（人/1平方kmあたり）	441人	348人
年齢中央値	27.3歳	46.5歳
地方人口	67.25 %	6.5 %
出生時平均余命	68	83
国内総生産（GDP：単位USD）	2.07兆	4.2兆

引用: <http://country-facts.findthedata.com/compare/82-122/Japan-vs-India>



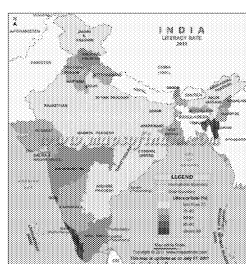
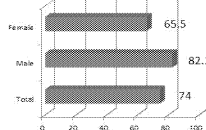
インド：多様性の国

- 州
- 言語
- 宗教
- 文化
- 生態系



教育に関する統計

識字率（2011年）

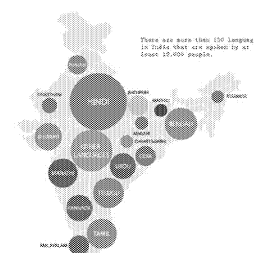


言語の多様性

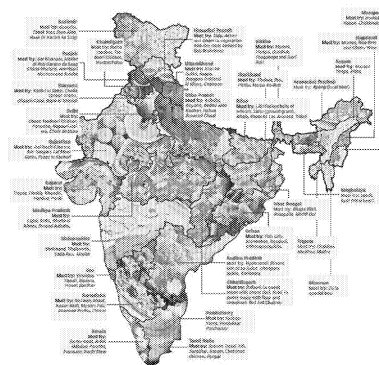
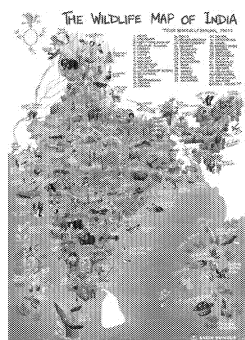
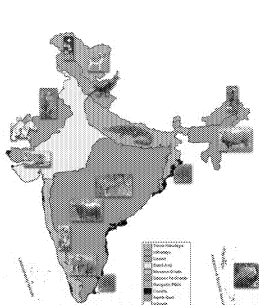
憲法第8附則指定言語：
22言語

インドには、**780を超える言語**と**66の文字**が存在

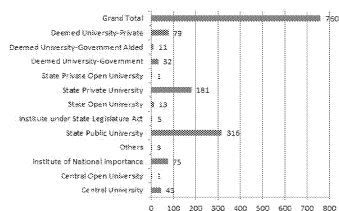
インド人口調査によるベースライン調査



インドの州の分割にあたって、言語は第一義的な基準とされ、母語は教育と学習の対象として特別な意義がある。
憲法第29条(1)において、母語の学習と保存は基本的権利として定められる。



大学数および分類



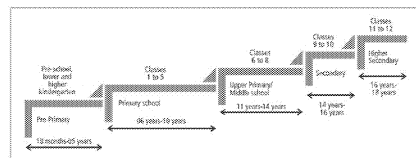
インドの大学は約3万6千校



インドの学制

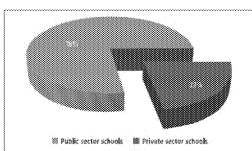
学校教育	分類	数
	初等教育	790640
	上級初等教育	401079
	中等教育	131287
	上級中等教育	102558
	合計	1425564

教育委員会：50
国際委員会：3

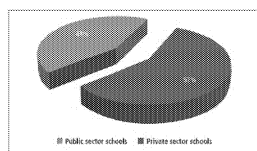


引用：
学校数：U-DISE-2013-
2014(仮)
高等教育：AISHE Portal
(www.aish.gov.in)

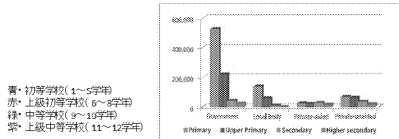
公立・私立の割合



全体(公立78%、私立22%)



中学校・高等学校(公立43%、私立57%)



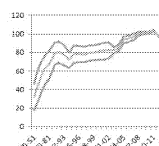
グラフ 左から

- ・政府
- ・地方自治体
- ・私立補助(中央政府からの補助を得る、政府の規制下にある学校)
- ・私立非補助(独立した学校)

青・初等学校(1~5学年)
赤・上級初等学校(6~8学年)
緑・中等学校(9~10学年)
紫・上級中等学校(11~12学年)

総入学者の割合

分類	男子	女子	計
初等学校	98.1	100.6	99.3
上級初等学校	84.9	90.3	87.4
中等学校	73.5	73.7	73.6
上級中等学校	49.1	49.1	49.1
高等教育	22.3	19.8	21.1

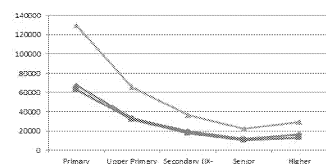


All Categories - Classes 1/2/3 (5-13 Years) - Boys
All Categories - Classes 1/2/3 (5-13 Years) - Girls
All Categories - Classes 4/5/6 (8-13 Years) - Total

1学校あたりの生徒数：
・約33%の学校が50名未満
・約54%の学校が100名未満
・約77%の学校が200名未満
小規模学校の割合は、政府セクターの方が民間セクターよりも高い。

入学者

学校(区分)および高等教育機関の入学者数



引用: EAO 2014

ミレニアム開発目標(MDGs)に向けた進展

- ・初等教育の完全普及および初等教育における女性の就学率・達成関連
- ・初等教育における児童の純入学者率の向上
- ・初等・前期中等入学者比率におけるジェンダー平等を達成(2011年)
 - － 全女児への教科書無償配布、「復学キャンプ」の実施、ブリッジング・コース、ジェンダー・衛生・暴力啓発のための追加カリキュラム、女性教師の雇用拡大などが要因
 - － インドが達成できなかった目標: 成人の不識字率を50%減少すること
2000年以降、成人識字率を26%減少



教育に関する課題

- 学校の施設、諸手続き、生徒の成績、教育機会に関する最低の基準ラインが定められていない
- 教育計画策定および管理に関する専門的知識の欠如特に、地方および機関レベルにおける教育の科学的根拠に基づく管理についての細分類化データ
- 能力と熱意のある教員の不在、そのための低い教育の質
- 学位や資格の獲得を優先する風潮
- 丸暗記を主流とする学習を助長するカリキュラム
- 試験における不正行為
- 技術・職業教育の軽視、雇用に結びつかない資格の偏重
- 高等教育機関の大半の凡庸な水準
- 多数の非就学児童
- 予算割当ての不足：求められるGDPの6%に満たない

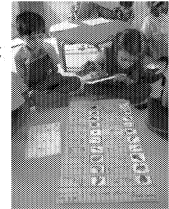


国家カリキュラム・フレームワーク (2005年)

今までに表明された意見：

- 丸暗記式学習から脱却し、学校外の生活へと知識をつなげる
- カリキュラムの幅を広げる：教科書をとおりて、児童の全人的な成長へと働きかける
- 試験をより柔軟かつ恐ろしくないものとする
- 教育の真の目的を話し合う
- 平等・正義・セキュラリズム（世俗主義）・自由など、民主的な諸価値についての責任感を生み出す

児童をアクティブ・ラーニングの主役に据える



おもなイニシアチブ

- The Sarva Shiksha Abhiyanプログラム（「すべての人のための教育」、2000-2001年～）
期限を定めて初等教育の完全普及をめざす。世界最大規模の教育イニシアチブのひとつ
- The Rashtriya Madhyamik Shiksha Abhiyan（国家中等教育キャンペーン、2009年～）
アクセシビリティと中等教育の質を改善、ジェンダー・社会経済的・障害による障壁をとりのぞいて、すべての中等学校が定められた規範に従うことをねらいとする。
2017年まで（第12期5か年計画の終了まで）の中等教育の完全普及をめざす。
2020年までに普遍的維持を達成

- The Rashtriya Uchchatar Shiksha Abhiyan（国家高等教育キャンペーン）
有資格の高等教育機関に対し、一定の基準にもとづき成果重視型の戦略的資金援助を行うことを目的とする



新教育政策（2016年）

新教育政策の要旨

- 就学前教育
- カリキュラムの刷新と試験改革
- 学校教育における学習成果のための規範
- 児童と成人の教育に関する権利の保護
- 包括的教育と学生支援
- 識字教育と生涯教育
- 教育および雇用可能性における能力
- 教育におけるICT活用

質の高い教育を

“これまでのところ、政府は国中に教育を広めることに注力してきた。しかし、今はもはや、質を重視する教育に移行する時だ。政府は今後、‘schooling’よりも‘learning’に重きを置かねばならない。



・インド国首相ナレンドラ・モディ
(All India Radio放送 ‘Mann ki Baat’第19回)

Skill India（スキル・インド）

- 職業教育とおとした技能開発の推進
グローバル化の進展の中、急速に拡大する経済と新しい技術の台頭に見合ったスキル教育を推進する
- 国家技能開発およびアントレプレナーシップ（起業家）政策
2022年までに国内の25%の学校で技能開発プログラムを統合的に実施。国家中等教育キャンペーン（RMSA）をとおし、多くの州において、中等学校の生徒のための技術訓練が導入されている
- 4,599以上の職業訓練機関が建築・エンジニア・ホテル経営・インフラ・調剤・テクノロジー・行政サービスその他の学位、ディプロマ、ボスト・ディプロマを授与している。これらの学校で174万人が学ぶ
- 人的開発資源省（MHRD）のイニシアチブにより、国家技能資格フレームワーク（National Skill Qualification Framework, NSQF）に対応した技能プログラムを、国家技能開発団体（National Skill Development Corporation, NSDC）認可の訓練実施体をつうじて、中等学校において行う

インドは世界に対し、最大の技能人材の提供国となり得る。そのために、マンパワーの要求をインドのみならずグローバルにマッピングしておかねばならない。（モディ首相のSkill India趣意演説）

国家技能開発およびアントレプレナーシップ政策（2015年）

- インド政府により、2022年までに4億人の訓練をめざす
- 必要とされる機関による枠組み：
 - 基準となる国家能力資格フレームワーク（NSQF）および産業技能審議会（Sector Skill Councils, SSCs）（33のSSCが運営中）
 - NSQFを運営する国家技能開発局（National Skill Development Agency, NSDA）
 - 訓練研修を行う能力・資格を生み出す国家技能開発団体（NSDC）
 - 調整を行うインド技能開発・起業促進省（Ministry of Skill Development and Entrepreneurship, MSDE）
 - 中央政府の21の省庁が、各々のターゲットグループのための技能開発スキームに関与している

質の良い教育教育イニシアチブ

- ・給食プログラム (Mid Day Meal Scheme, MDMS)
 - 給食プログラム (MDMS) は人的開発資源省 (MHRD) が1995年に開始。2008-09年からは後期初等教育区分へも適用されている
 - 1億2千万人近い児童が本スキームの恩恵を受けている
 - 本スキームにより、260万人近い女性たちが、調理兼ヘルパー (Cooks-cum-Helpers, CCH) としてパートの雇用を得ている。MDMSはこの種のプログラムとしては世界最大

MDMSは、多様な社会的背景の子どもたちが、日々ともに食事をすることで、学童間に存在するカーストや階層を打破し、社会の平等を促進することに貢献している。また、学校におけるジェンダー格差も、女兒の通学を妨げる障壁をなくし、調理兼ヘルパーとして女性のパートタイム雇用を生み出すことで縮小されている。

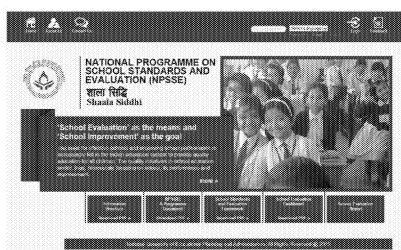


- ・継続的・総合的評価 (Continuous and Comprehensive Evaluation, CCE)
 - 生徒の学習における課題を、学期の開始と同時に休み時間を使って洗い出し、彼らの学習を促進するための的確な対応策を適用することで、生徒のパフォーマンスを改善することをめざす

継続的・総合的評価スキーム (CCE) は、各学校が、CCEガイドラインに沿って独自の学びの課程を計画するにあたり、柔軟な枠組みを提供している。



学校教育のスタンダード



Saransh[*ウェブポータル]は中等教育中央委員会 (Central Board of Secondary Education, CBSE) によるイニシアチブ。提携学校と保護者のための包括的な学習・分析ツール。

- Saranshにより学校、教員、両親の距離が縮まり、彼らが生徒の発達をモニターし、そのパフォーマンス改善のための支援を与えることが可能となる

ICT教育

- さまざまなITの利用
 - ・教室における教員の補助
 - ・補習
 - ・教員研修
 - ・成人識字教育
 - ・高等教育の教材
 - ・マネジメントおよびガバナンスのツールとしての「ビッグ・データ」

ナショナル・アカデミック・デポジトリ (National Academic Depository, NAD) 教育資料のためのデジタル・デポジトリ



教員養成

- ・国家教師啓蒙審議会 (National Council for Teacher Education, NCTE)
 - 中央政府の法人組織。国内の教員の養成・研修を計画・調整
- ・就業前コース
 - Primary Teachers Certificate (PTC), B. Ed and M. Ed, Integrated Bachelor and Masters in Education
- ・就業中コース
- ・教師啓蒙ポータル
- ・教員資格試験 (RTE)



Pandit Madan Mohan Malaviya 教員と教育に関する国家指針

- ・機関ベース
 - 教育学校 (Schools of Education, 30校)
 - カリキュラムと教育学のための教育拠点 (Centres of Excellence for Curriculum and Pedagogy, 50拠点)
 - 教員養成のための学際センター (Inter-University Centres for Teacher Education)
- ・個人対象
 - インノベーション、賞、ワークショップやセミナーを含む教育リソースの付与
- ・ネットワーク・連携
 - カリキュラムの刷新と改革のための科目ネットワーク (Subject Networks for Curricular Renewal and Reforms)
 - 教育のための国立リソースセンター/高等教育アカデミー (National Resource Centre for Education / Higher Education Academy)
- ・アカデミック・リーダーシップ
 - アカデミック・リーダーシップと教育マネジメントのための機関 (Institutes of Academic Leadership and Education Management)

Rashtriya Avishkar Abhiyan (RAA) 国家インベンション・キャンペーン

- ・学校で得た知識を学校外の生活に結びつけることを重視
- ・科学と数学の学びを楽しく有意義なものとする (一定の水準の確保)
- ・子どもたちの間で探究心、創造性、科学と数学への愛、テクノロジーの有効利用を育む



おもなインベンション

- ・保護者およびコミュニティの啓発
- ・科学ミュージアム、発明ハブ、科学展・数学メーラー (フェア) の訪問・見学
- ・州・国主催の学校間の科学・数学コンテスト、オリンピック大会等への生徒の出場
- ・科学学習の促進のために科学技術省によるプログラムのアウトリーチの拡大
- ・子どものための科学・数学・テクノロジーに関するクラブ活動
- ・科学・数学の教員サークルの強化
- ・学校モニタリング
- ・教室における教えと学びの有効なトランザクション
- ・テクノロジーの活用をとおした教員支援機関の強化
- ・リソース教材の開発
- ・科学・数学の授業におけるテクノロジーの活用
- ・授業・学習のための設備と教材の提供
- ・学校の科学・数学ラボの充実
- ・科学・数学担当教員の職員
- ・生徒のための科学・数学の評価設計
- ・教員の科学・数学・テクノロジーの準備学習

Vigyan Prasar • Vigyan Prasar (VP) インド政府・科学技術局管轄下の独立法人。 科学的・合理的なものの見方を促進し、 科学技術通信のリソース拠点として、 大規模な科学啓蒙普及活動を実施	科学技術局 (Department of Science and Technology) • 国立科学技術通信審議会 (National Council for Science & Technology Communication, NCSTC) • NCSTCによる多角的な取り組み： ・ 伝統民族的メディアを活用した通信科学 ・ 科学通信・普及のためのマス・デジタル・メディアの活用 ・ 科学・技術の普及のためのソーシャル・メディアの活用 • 国家児童科学会議 (National Children's Science Congress, NCSC) 1993年開始 科学通信プログラム
Science Express (サイエンス・エクスプレス) サイエンス・エクスプレス (特急) は、16両 (冷房付き) の列車上の科学展示会。 2007年10月30日の以来、インド国内を走り続けている。 走行距離12万2千キロ、391回の停車、1404日間、1億3300万人を超える来場者を獲得。 サイエンス・エクスプレスは、移動展示会として、インド最大規模・最長期間・最多の来場者数を誇り、その旅路をつらじて6冊のLimca社Book of Recordを発刊。  	その他のおもなイニシアチブ • 国立科学教育研究機関 (National Institute of Science Education and Research, NISER) • インド政府のオンライン学習プロジェクト (National Programme on Technology Enhanced Learning, NPTEL) : ウェブと動画によるEラーニング・コース (工学・科学・人文科学) • ヴァーチャル・ラボ • 口頭チュートリアル対話システム • 'E Yantra' イニシアチブ : 工学教育にロボット工学を組み込む • デジタル・ライブラリ 'Inflibnet' • デジタルコンテンツを使った学び 'E pathshala'
Thanks 感謝	

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

インド教職員招へいプログラム

実施報告書

2017 年 2 月

編集・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [100]

©2017 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)